『コリン』、ヤンカ、ミールケ

塚田　眞幸

忘れるな、おまえが打ち殺された犬のように歴史のごみための上に
投げ捨てられる時代がやってくるのを（W・ヤンカ）。①

一、

一九七九年五月二二日に、シュテファン・ハイムはベルリン・ケペニック区裁判所で、外国為替法違反のかどで、罰金九〇〇〇マルクの略式命令という有罪判決を受けた。

この場合の外国為替法違反とは、ハイムが小説『コリン』②を、東独の著作権事務所の許可をえずに西独で出版することによって、無許可の外貨流通を計った（外為法第一条第一七項違反）からというのである。

さて、東独の著作権事務所の許可をえずして外国で作品を出版すると、なぜ外為法違反となるのか、不思議に思

う人がいて当然であろう。ハイム自身に説明してもらおう。[3]

まず、事実経過から。

三月二三日、ベルテルスマン出版から、透明フィルムで包装された『コリン』と題する一〇冊の書籍が、被告人ハイムあてに送付される。これはベルリンの郵便局税関によって確認される。

四月一七日、税関当局はハイムに対して、銀行口座の閲覧を申請。検事総長は同日「予期されうる請求権を確保するために」、ベルリン市貯蓄銀行の口座番号六七五二一六九一六五〇二六八に対する仮差し押え命令を発令。

四月一九日、仮差し押え令の執行。ハイムは貯金通帳を、税関に提出。同日、尋問を受けるために連行され、「あなたは、許可を得ずに外貨の流通を提示、ないしは実行したと告発されている。この点に関して意見があったら述べなさい！」と言われる。

これに対しハイムは、「わたしは、外国為替条令違反とされている問題を、著作権擁護のための条令違反と、いわゆる著作権事務所の仕事とから区別して扱ってもらいたい。著作権事務所はこの二つの機能を、作家たちの外国為替の登録と、これらの作家たちの作品の版権委託の許可を一体化している。後者の機能は、つまるところ検閲行為であり、ＤＤＲ国内での検閲を世界の他の部分に転用するものである。ＤＤＲ検閲当局は、著作権事務所をその道具として利用することにより、ＤＤＲ憲法と、文明国で認められているあらゆる文学上の諸原則とに矛盾している。わたしはそれゆえ、こうした検閲措置に従うことをこれまで拒否してきたし、現在も拒否しており、今後も拒否するつもりである。従って、わたしの文学上の諸権利は上記の事務所に配慮するこ

となく委託するものである。さらにＤＤＲにおける検閲の実際とのわたしの経験からいって、小説『コリン』がこの国ではいずれにせよ許可されないだろうことは明らかであるから、この点からいっても、さきに述べたごとく、著作権事務所を原則上拒否することになるのである。しかし政令によれば、著作権事務所がわたしのケースにおいて権限を持っているところからして、わたしはもちろんどんな犯罪も犯す意図もないのに、検閲に対して身を守ることによって、自動的に外国為替法に違反せざるをえない状況に陥ったのであり、その点で外国為替法諸規則に違反したのである」との意見表明を行う。これは尋問官たちによって自白と受け取られることになる。

五月九日、二回目の尋問。尋問官たちは、被疑者が右に述べた犯罪のためのさまざまな理由には理解を示さず、もっぱらどのようにして被疑者が原稿を外為国へ持ち出したのか――被疑者自身がそれを持って国境を越えた――、また出版によりどれほどの西側通貨を入手したのか知りたがった――四年間の仕事に対しおよそ二五六〇〇西マルクである――。

その後の最終的手続きが、ケペニック区の女性裁判長によって行なわれ、当法廷は各種書類と検事の申し立てを吟味し、被疑者に対して起こされた告発は正当であると認定する。そのうえでかの女は被疑者に、九〇〇〇マルクの罰金刑と、すでに押収されている『コリン』の贈呈本を没収する内容の略式命令を手渡す。被疑者は、この判決の政治的動機づけからいって、上級機関もこれを追認するだけであろう、と思うので異議申し立ての権利の放棄を表明する。

時は経過して一九九〇年九月一〇日。

ＤＤＲ検事総長は、前記七九年五月二二日付けのベルリン・ケペニック区裁判所の略式命令の破棄を、有罪判決を受けた者の利益となるよう申請する、ハイム氏は当時すでに反論の余地なく、自分が外国為替法の申告義務に違反したのは、その義務が作家としての活動を検閲するのは憲法違反同然であるからだと表明しているし、著作権事務所がハイム氏の本を外国で出版する許可をあえて与えなかったのは、その本が東独内の状況をリアルに反映していたからである。実はただ単に、ハイム氏の口を封じ、これ以上の社会批判的なものの出版を妨げようとするためであった。

ゆえに提案は次のごとし。

一，ケペニック区裁判所の一九七九年五月二二日付略式命令を破棄すること。

二、ハイム氏を刑事訴訟法第三二二条第一項第三号により、一九九〇年六月二九日付で正式に無罪とすること。

一九七九年九月一九日、ＤＤＲ最高裁判所は、九月一〇日の検事総長の提議に基づき、ハイムに対するケペニック区裁判所の略式命令の破棄を認めると宣言することを決定する。

これで一件落着かに見えたが、事態は思わぬ方向に発展していく。一〇月三日の両独の統一によってである。

この破棄の提議自体、まだ判決が下されておらず、一〇月三日に、ＤＤＲ検事総長は活動を停止し、未処理書類は西ベルリンの上級地方裁判所の検事局へと先送りされる。後者は、破棄の提議は明らかに根拠のないものとして却下するよう提議する。「有罪判決を受けた者を苦しめている重大な法の誤りは、有罪判決の成立を顧慮しても見い出されなかった」というのである。さらに有罪判決は「純粋に基本的な訴訟手続き上の規則違反のもとで成立した恣意的な判決の可能性がある」とする根拠は明白でない、というのである。そしてさらに、

「一九六八年四月六日付のＤＤＲ憲法は第二七条において、自由で公然たる意見表明、ならびに報道、放送、テレビの権利だけはわかっていたが、しかし芸術の自由はわかっていなかった。ＤＤＲ憲法第二七条において基本的諸権利が保証されていた以上、それらは法の留保のもとにあった。」逆に「仮に下された刑罰が厳しいと考えられうるとしても、それゆえに不法であるとまではいえないだろう。当事者自身、略式命令に対し異議を申し立てなかったのだから、この自分にとって不利益となる判断行使をこの具体的事例においては是認できると思っていたのであろう。」

有罪の略式命令を破棄し、正式に無罪とすることが提議されながら、統一ドイツの、つまり西ベルリンの上級地裁の判断が、ＤＤＲ憲法は第二七条において基本的諸権利が保証されていた以上、芸術の自由に理解がなかったとはいえ、重大な法の誤りはなかった、というのでは、ハイムも泣くに泣けない気持ちであったろう。自分は何のために苦労してＤＤＲに留まったのか、形式的に意見表明の自由が保証されていたとはいえ、実質的に保証されなかった社会を変革するためではなかったか。こうした上級地裁の判断が先例となれば、国家評議会議長ホーネッカー、外貨調達者シャルク＝ゴロトコフスキー、スパイのボス・マルクス・ヴォルフは言うまでもなく、壁の狙撃手たちもまたＤＤＲの法律に厳密に従って行動したのだから、安心して裁判を受けられることになる。「何が自由だ！何がモラルだ！何が民主主義だというのか！法は法であり、外為法も言うまでもないというのか」「ＤＤＲが法治国家であったことを事後証明したがる利口な検事たちが、西ベルリン上級地裁にいるとは何とすばらしいことだろう」とハイムは言う。

しかしその後、大どんでん返しがやってくる。

ハイムに対する訴訟手続きとおよそ同時期に、全く似た訴訟がローベルト・ハーヴェマン教授に対して行なわれていたが、告発の内容は同様に、外国で論文を無許可で出版することによって行なわれた度重なる外為法違反である。ハーヴェエマンもハイムとほとんど同じ論拠を持ち出す。「この訴訟の手続きは、外国為替規則違反のかどで起されているのではなく、実は意見表明の自由を抑圧する目的に役立っている印象がぬぐえない。」一九七九年六月二〇日、フュルステンヴァルデの裁判官たちから、外国為替法第一条第一七項により一万マルクの罰金刑の有罪判決を受けるが、ハーヴェマンはハイムとは逆に控訴する。フランクフルト（オーダー）の地裁においても、七月一八日に明らかに根拠がないとして却下される。ハーヴェマンは亡くなり、未亡人カーチャは判決を破棄するよう要求し、ＤＤＲ検事総長は破棄に賛成し、またしてもこの訴訟手続きは九〇年一〇月三日以降、連邦共和国の裁判所に行きつく。ただしこの裁判所は、フュルステンヴァルデがブランデンブルク州に属しているのでポツダムにある。そしてこの地裁第二破棄部は九一年七月三日に全員一致で、フュルステンヴァルデ区裁刑事部の判決を破棄し、有罪判決を受けた者を無罪とする。

フュルステンヴァルデとフランクフルトの全体として不法な訴訟手続きは、当事者を怯えさせ、当時のＤＤＲと支配政党の社会主義統一党に対して、公然と批判するのを妨げることを目的としたものであり、この目的に相応するのが、公判において、問題は外為法違反ではなく、被疑者の意見表明を封じることであるとする被疑者の応訴が、故意に抑圧されたことであり、「この手続きと共に、当事者を抑圧し、自由な意見表明――ＤＤＲ憲法第二七条――の権利の擁護を妨げるという目的だけを追及したこの判決も含めて、人権の尊重と適法性を認めるという原理原則に対して違反したことは、」詳しい解説を必要としないだろう、と言っている。

同じような内容の訴訟手続きに対する判断が、全く右と左に別れてしまうようでは、やはり問題であると言わざるをえまい。東西ドイツ再統一直後の混乱期であったとはいえ、旧ＤＤＲのポツダムの裁判所が、法の不正な運用をはっきり指摘しているのに対し、かつてＤＤＲに批判的であった西ベルリンの上級地裁が、旧法とはいえ、法は法だからと言わんばかりの杓子定規の判断ぶりは、皮肉といえば皮肉である。正に、何が自由だ！何がモラルだ！とハイムが怒るのも無理はない。

当然ながら、こうした判断では、ホーネッカーらを裁くことは出来ない、と西ベルリンでも判断したのであろう。ベルリン地裁の破棄法廷は、九二年一月一七日の会議において、全員一致で、「ベルリン・ケペニック区裁判所の、七九年五月二二日付け、三〇日発効の略式命令は、刑事訴訟法第四項第三四九条にのっとって破棄される」と決定した。要するにこの訴訟手続きというものが、一人の作家の意見表明を禁じ、かれの創作の出版を阻む目的を持っていたことを認めたのである。

注

① Walter Janka: Spuren eines Lebens. Rowohlt, 1991, S.431.

② Stefan Heym: Collin. C.Bertelsmann, 1979.

③ 以下の引用および要約はS. Heym: filz, Gedanken über das neueste Deutschland. C. Bertelsmann, 1992. Präzedenzfall. S.7 ff.

二、

著作権事務所の許可を得ずに著作を外国で発表すると、自働的に外国為替法に違反することになるという、明らかに表現の自由を制限しようとする姑息な手段で、ハイムは罰金刑に処せられた。このあと間もなく、同様の行為を規制する新たな、より厳しい刑法第二一九条（二年から五年の懲役と五桁ないし六桁の罰金刑）が公布され、これはハイムにちなんでハイム法と呼ばれることになった。

当局にとって都合の悪いことは、何が何でも黙らせようとするのは、さもないと政権の基盤を掘り崩されかねないと感じているからであり、政権の維持に自信が持てないからであるのは言うまでもない。「現実に存在した社会主義においては、指導的人物たちが異常に敏感だったのは、かれらが不安で自信がなかったからである。かれらは権力を自分で獲得したのではなく、手に与えられたからである。つまりかれらには獲得した正統性という感覚が欠けている。どんな種類のリアリスティックな物語も、批判も、かれらの最も敏感な所を、つまり正統性の理由づけ、権力の正統さ、権力を正統化する感情において打つ所があったのだ。それゆえかれらは文学を注意深く、腹立たしい感情を抱いて観察したわけである。文学は見てくれを危うくしたのだ」と、のちにハイムは断言している。[1] こうした感情に突き動かされた当局が、特にハイムの小説『コリン』を狙い撃ちにしたのはなぜか。ハイムは『コリン』執筆の動機を「わたしも六五歳を越えたし、熱い粥の回りをいつまでもぐるぐる回るのには疲れた、つまり肝心なことをいつまでも言わないでいるのにはうんざりしているのだ」[2]と述べている。これを聞いた文化副大臣のK・ヘプケが、粥は恐らくそれほど熱いということはなかろう、と返答したにもかかわらず、かれは『コリン』を禁書

とした。[3] なぜか。

「この本は一切の用心も顧慮もなく東ドイツの歴史をスターリニズムの歴史として展開した、東ドイツの作家の手になる最初のものである。作家コリンはひどい心不全に苦しみ、特権者用の病院に臥しながら、熱にうかされたように自分の回想録を書くが、そこで彼は最後のところで虚言を拒み、当時つまり五〇年代の真実の姿を語る。二、三室離れた病室には国家公安局長官のウラックが同じく病臥して死にかかっている。一体どちらが相手より長く生きるか、どちらの原理が勝利を得るのか。コリンは回想録を完成させることなくして死を迎え、ウラックは生き延びる」[4]

この粗筋のモデルあるいは背景となっている事件、もしくは出来事とは何か。それは当時東欧諸国で吹き荒れたスターリン主義的見せしめ裁判の一環として、ＤＤＲでも行なわれた「ヤンカ・ハーリヒ事件」を中心とする未だに克服されず抑圧され、タブー視されているＤＤＲの現代史、すなわちＳＥＤのスターリン主義的過去であり、それにからまるさまざまな人間群像とその思想、感情、内面世界である。その人間群像には国家保安省大臣エーリヒ・ミールケ、元アオフバオ出版社社長ワルター・ヤンカ、元哲学雑誌編集者ヴォルフガング・ハーリヒ、元政治局員パオル・メルカー、検事総長エルンスト・メルスハイマー、文化大臣ヨハネス・Ｒ・ベッヒャー、作家アンナ・ゼーガースやシュテファン・ヘルムリーン、ハンガリーの哲学者ゲオルク・ルカーチ、女優ヘレーネ・ヴァイゲルらが登場する。かれらはその仮名で、あるいは職名から容易に推測できるが、かれらにからまってもちろんさまざまなフィクショナルな人物も姿を現わす。コリンの担当医クリスティーネ・ロート、その上司ゲリンガー教授、コリンの妻で歌手のニーナ、クリスティーネの別れた夫で外科医のドクター・ロート、ウラックの孫のペーター、コリン

の友人で評論家のポロックなどが、ＤＤＲ社会に特有のと言っていい複雑な絡み合いで展開するのは、まさに一級の社会政治小説なのである。

そこにはＤＤＲ当局にとって都合の悪い歴史や現象が現出するのは、当然ながら避けられない。とりわけウラックを長とする国家保安省、そしてそれと結びつく五〇年代のスターリン主義的見せしめ裁判については、これまでＤＤＲ史上のタブー、ホットなテーマとして誰も触れたがらないハードルであっただけに、ハイムがかなり徹底した形で取り組んでいるという点が、ＤＤＲ当局には看過しがたいと思われたのも無理はなかろう。ハイムは非公式ながら、国家保安省でもこの小説は複雑な気持ちで読まれたが、その中のいくつかの出来事は人の心を深く揺さぶるものがあった、との感想を伝え聞いている。[5]ということはつまり、国家保安省の内でもそうであるなら、この小説がＤＤＲ国内で広く読まれるようなことになれば、その内容に衝撃を受けた読者の、特に知識人、文化人階級の批判の矛先がどこへ向けられるかは明らかであろう。この小説に盛り込まれた真実の重みをしっかりと受け止めるだけの度量は、国家保安省はもちろん、ＤＤＲ当局にはなかった。以前からうるさいことを言うこのやっかいな作家には、それゆえとにかく一度思い知らせてやろうというのが、この外為法違反という裁判ざたなのである。

では、当局がそれほどまでしてＤＤＲ国内に広まることを恐れたこの小説が扱っているタブー、ＤＤＲスターリン主義とは何であったのか、を少し長くなるが小説の粗筋を追いながら見ていくことにしよう。そうすることでこの小説のテーマ「社会主義の作家の倫理、沈黙の限界とその結果」[6]を浮かび上らせよう、というのがこの論の主旨である。

注

① R. General/W. Sabath: Stefan Heym. Elefanten Press, 1994. S.68
② S. Heym: Wege und Umwege, über Collin. C. Bertelsmann, 1980. S.376.
③ S. Heym: Nachruf. C. Bertelsmann, 1988. S.822.
④ ヴォルフガング・エメリッヒ著『東ドイツ文学小史』津村正樹監訳、鳥影社、一九九四年、四一四頁。
Wolfgang Emmerich: Kleine Literaturgeschichte der DDR, Erweiterte Neuausgabe. Gustav Kiepenheuer, 1997. S.328
⑤ Nachruf. S.822.
⑥ Karl Wilhelm Fricke: Der Wahrheit verpflichtet, Texte aus fünf Jahrzehnten zur Geschichte der DDR. Ch. Links, 2000. S.482.

三、

この小説の主人公は人気作家ハンス・コリンである。かれが狂言回しとなって、かれもその一人であるＤＤＲ知識人と社会主義体制権力とのかかわりがＤＤＲの戦後史の中で展開される。そして登場人物たちのなかに、実在の人物がモデルとなっていると容易に推定できる人物が何人か存在する。

まずその一人がゲオルク・ハヴェルカという名で登場するが、ＤＤＲ史に関心がある者なら誰でも知っているであろうヴァルター・ヤンカである。ヤンカは一九九四年三月一七日に亡くなったが、その三年前に大部な自伝『ある人生の軌跡』①を遺している。さらにその二年前、八九年にその自伝の中の三つの章が『真実と係ることの困難さ』②

と題して発表されていた。ただしこの三章は、のちの自伝『・・・軌跡』では章立ても異なり、内容もかなり推敲されている。八九年といえばベルリンの壁が崩壊し、東西冷戦構造が消滅していくきっかけとなった年である。そしてその三章の朗読会が東ベルリンの「ドイツ座」で開催されたのは一〇月二八日であった。壁崩壊のまさに二週間前である。なぜこの日付けを強調するかといえば、ＤＤＲが健在であったなら、決してこうした試みは許可されなかったであろうことは疑いないからだ。なぜならそれにはＤＤＲ当局から受けたスターリン主義的な不当行為を暴露する内容が含まれていたからである。そしてそれはまたヤンカと同時代を生きた人びとにとって衝撃的な証言であったことは言うまでない。作家のクリスタ・ヴォルフは、ここには過去一〇数年間にＤＤＲ国家のほかのすべての悪を派生させたあのスターリン主義という根本的な悪が、初めて公然と出来る限り徹底的に語られている、と語り、目的は手段を聖化するというその不道徳的な手段が目的を破壊し、社会主義を空洞化しただけでなく、その制度が具体化しようとした価値をも腐食させ、崩壊させてしまった、と感想を述べている。[3] それほどに重要な証言が公開されえたという事実は、今から振り返ってみれば、事態がまさにＤＤＲ崩壊前夜に立ち至っていたことを物語るものである。

しかしこの自伝に対してフリッツ・Ｊ・ラダッツのように「ヤンカは共産主義者たちの権力濫用、ソ連の策略、間違った歴史記述とのあらゆる対決を避けている」[4]と、かなり厳しい評価を下す人物もいる。ラダッツのかなり長い評論を要約すれば、大きく三つの論点にしぼることができよう。一つは、スペイン内戦時に国際旅団の一員として参加し、主要な戦場を転戦し、指揮官までつとめながら、ソ連の政治警察ＧＰＵの殺人部隊が、政治的に好ましからざる人間、アナーキストなどを消させ、殺していたこと、バルセロナにはトロツキストと見なされたスペ

インのＰＯＵＭ（マルクス主義統一労働者党）のメンバー用の牢獄があり、国際旅団の中心地アルバセテには拷問用地下室が、バルセロナの港には一種の浮かぶ強制収容所があったことなどにはほとんどふれられていない。つまり拷問や殺人、スターリンの裁判やトロツキーの暗殺は、〝ある思考体系の結果〟ではなかったのか、その根本原因をかれは問おうとしない。二つは、この問題は道徳的態度の問題ではなく、むしろ哲学的問題であることだ。すなわち〝本来は間違いのない社会主義〟という理念は世俗的な神学にすぎない。つまり理念それ自体である。その理念を実現しようとした者たちが犯罪者であったし、その実現がヨーロッパの半分とソ連を経済的困窮と道徳的カオス、政治的破産に追い込んだ。三つは、ヤンカは反体制派とみなされたくなかった、何もＤＤＲに反対したことはない、と言っているが、ブレヒトは、モスクワ裁判で告発された政治家、軍人、知識人たちの無実を断言した人に対し、だからなおいけないんだ、と言った。要するに体制の根本悪に対して何もしなかったのがいけない、とラダッツは同じＤＤＲの出であるだけに厳しい。

こうした評は、あとになってみれば何とでも言える、という感じがしないでもないが、ＤＤＲの人びとの受け取り方とは異なって、一面で根本的問題を提起している。無実の人びとが投獄され、拷問を受け、処刑されるような体制は、その実践の仕方に問題があったのか、あるいはその理念そのものをもう一度問い返す必要があるのかどうか、という問題である。

さて、こうした厳しい見方があるにもかかわらず、もしくはあるからこそ、作家ハイムはこうした問題、特に体制の負の部分を象徴する国家保安省の長Ｅ・ミールケと、その犠牲者の一人である出版社の社長Ｗ・ヤンカを架空の人気作家Ｈ・コリンと絡ませて、五〇年代のスターリン主義的政治実践の実情をどう描き出し、どう評価したの

か、それを小説の展開とヤンカの回想録を中心に探ってみよう。

1，ヤンカ　一、

まずヴァルター・ヤンカの略歴[5]を見ておこう。一九一四年にケムニッツの労働者（機械工）家庭に生れ、小学校を出たあと植字工となり、三二年にＫＰＤ（ドイツ共産党）に入党。三三年にＫＪＶＤ（ドイツ共産主義青年同盟）のエルツゲビルゲ地方の政治指導者となり、反ファッシズム抵抗運動を指導。三三年に逮捕され三五年までバオツェン刑務所とザクセンハオゼン強制収容所に入れられる。その後チェコスロヴァキアへ国外追放、三六年まで東プロイセンで非合法活動。三六年から三九年までスペイン市民戦争に国際旅団中隊長、スペイン人民軍大隊司令官として参加。三九年二月から南フランスのサン・シプリエン、ギュール、ル・ヴェルヌ、レ・ミーユで収容所生活。四一年八月政治局員バオル・メルカーらとレ・ミーユを逃げ出しマルセイユへ。そこで未来の伴侶となるシャルロッテ・ショルツと知り合う。さらにオラン、カサブランカ経由でメキシコへ亡命し、四七年まで亡命生活をおくる。「自由ドイツ運動」ならびに同名雑誌の共同創設者。さらにアメリカ大陸で最も重要な亡命出版社であるエル・リブロ・リブレ出版社を創設し、Ａ・ゼーガース『第七の十字架』、Ｈ・マン『リディーツェ』、Ｅ・ゾンマー『聖者たちの反乱』、Ｅ・Ｅ・キッシュ『メキシコにおける発見』など刊行。四七年一月ソ連船でムルマンスク、モスクワ経由でドイツに帰還。ＳＥＤ党員となり、パオル・メルカーの個人的協力者。四八年から五〇年までＤＥＦＡ（映画制作会社）総支配人。五一年アオフバオ出版社に入り五二年から社長。五六年一二月六日にウルブリヒト

政権に対する反革命陰謀の罪で起訴、逮捕される。五七年七月二六日からの見せしめ裁判で懲役五年の判決を受ける。アオフバオ出版社内と雑誌「ゾンターク」編集部をめぐるいわゆる反革命グループ結成の政治的首謀者と見なされたのである。五七年から六〇年までリヒテンベルクとバオツェンの監獄の独房に拘留される。ＳＥＤから除名。重病にかかり六〇年一二月二三日に国際的な抗議により早期に釈放される。六二年から七二年までＤＥＦＡの文芸部員、その後年金生活となりフリーランスの評論家、翻訳者として活動。ＳＥＤ再入党。八九年五月一日祖国功労章金賞を授与され復権。九〇年一月五日ＤＤＲ最高裁は五七年の判決を破棄し、無罪を言いわたした。

こうしたヤンカの経歴を見ると、殺されることこそなかったとはいえ、やはりスターリニズムの犠牲者の一人であることに間違いはない。ウルブリヒトという小スターリニストが、結局は自分の権力保持のために、どれほど多くの犠牲者を必要としたか、そしてその権力体制が歴史の波に飲み込まれ消滅してしまったことを考え合わせると、犠牲者本人ならずとも、いったい何のための犠牲であったのか、という感慨にふけらざるをえまい。諺をもじれば、一将功成らず万骨枯る、である。ヤンカがただの万骨ではなかったにせよ、見せしめ裁判が誤りであった、との公式の自己批判もなく、祖国功労章授与でお茶を濁すようなことでは、スターリニズムと手を切ったことにならないのはいうまでもない。その点をお座成りにしてはならない、とハイムは『コリン』を書き、ヤンカは自伝『ある人生の軌跡』を書いたのである。

さて、このヤンカの経歴は小説『コリン』にどう反映されているか。まず小説の冒頭部分、人気作家ハンス・コリンが心臓発作で入院している要人用病院に、コリンに回想録を書くように勧めた親友で評論家のポロックの同僚ゲオルク・ハヴェルカが、コリンの主治医クリスティーネを訪ねてくるところから始まる。妻のドロテアを診ても

らうためである。狭心症で入院したドロテアの面倒を見てくれるクリスティーネを信用してハヴェルカは、ドロテアについて「当時私がル・ヴェルヌの収容所に捕っていた時、かの女はマルセイユのメキシコ領事館を買収して、救いのヴィザを出させたのです」「それから亡命時代がきて、その後またこのドイツで・・・すべてが違った風になるであろう新世界の創造を信じていたのです」「それからつらい年月がやってきて、その間かの女は一人で過ごさねばならなかったのです」[6]と語る。そしてかれの時代の誰一人として、暗い体験のない者はいない、その体験に口をつぐんでいるが、と言い、革命がいつも最も困難な国ぐにで、最も困難な時代に起るという事実は、しかし剰余価値論が正しいことの論拠にはならない[7]（これがハイムの基本的立場である[8]）と語る。さらにハヴェルカはスペイン時代にコリンの司令官であり、コリンが最初の本をモスクワで出したこともあって、人類のためにもかれを前線から離れさせねばならない、そこで同志、アルバセテへ帰れ、特別任務だ、[9]と言ってコリンの命を救ってやったことが明らかにされる。

この冒頭シーンで、ヤンカとシャルロッテを知る者は、ハヴェルカがヤンカであり、ドロアテがシャルロッテをモデルにした人物であることを知ることになる。コリンという人物は架空の人物であり、当然ながらヤンカの回想録には「いいか、ヴィーラント（コリンの本に出てくるコリン自身）、われわれの一人がここを逃れて報告できるんだぞ、ここで起っていること、なぜ起きているのか、この責任は誰にあるのかをな！君は生きる義務がある。わかるか、なぜなら君は書かねばならないからだ、これを書かねばならないからだ！・・・・・」[10]と言って、戦線を離脱させてやったような人物との出会いのシーンは存在しない。

このセリフに強調符がついていることからもわかるが、これはスペイン内戦の実情を書け、というよりもむしろ、

スターリニズム下で何が、どうして、誰によって起ったのかを書くべきだ、とヤンカに向って、あるいは事実を知る多くの人びとに向っての呼びかけの声と解釈すべきであろう。この小説の主題のひとつは書くか、書かないか、にあるからであるし、これはまた七六年のビーアマン追放事件以来の当局による思想、言論弾圧に対して抗議の声を上げるよう広く連帯を呼びかける声であり、またハイム自身に対する自己鼓舞の声でもある。諸君、沈黙するのはやめて、声を上げようではないか！と。

そのハヴェルカ＝ヤンカが登場する主たるシーンは四シーンある。その最初のシーンは、逮捕されたハヴェルカのシェーンハオゼンにおける予審拘留の回想シーンである。小説では次のように描写されている（要約であり、原文どおりとは限らない。以下同じ。）

ハヴェルカとドロテアの回想。妻の病状に気をつかうハヴェルカは責任を感じるがどうしようもない。亡命時、情熱的に語った社会主義の理念が今や紙くずであり、自ら生涯の規範としてきたテーゼと教義がかれの眼前で崩壊していた。何よりもかれを打ったのは、予審拘留と刑務所における経験だった。しかもブルジョワ国家の刑務所ではなく、そのために闘ってきた国のそれでの。ドロテアが弁護士費用を乞い集め、政治的状況が変わり、彼女の知らない友人たちがくり返し当局のドアをたたいてくれたので、とりわけかれ自身がねばり強かったので独房から帰還できたかれは、古い図式を、古いイコンを打ち砕いてしまっていた。ただ完全な名誉回復と、本来の入党一九三二年の日付けの党員証の再交付を要求したが、かれらはこれこそまさに許そうとはしなかった。党が間違っていたことを告白することはできない。党は決して間違うことなないのだ。[11]

同じ病院にいるコリンは、当時ドロテアがささやかな願いを持って近づくと、恐ろしそうに拒絶した他の人びとと違い、かの女に現金を与えてくれたのだ。ハヴェルカがコリンを非難できるとしても、せいぜいなすべきことをしなかった怠慢の罪であることを承知している。[12]

ハヴェルカは病室にコリンを訪ねるが、お互に気まずい思いをする。古傷には触れるべきじゃないな、それは何ももたらさない、とハヴェルカ。コリンからウラックが病室に入っていると聞いたハヴェルカの首すじに悪寒が走る。あの蔑んだ、探るような声の調子を聞くといつも生じたあの悪寒が。そこでコリンにホーエンシェーンハオゼン刑務所の様子を話して聞かせる。

最悪なのは、誰ともわからぬ者の意志だ。いつ眠りが破られるか、何回破られるか、狭い独房の裸電球をいつ消すか、つけるか、いつ息をするか、というのは部屋の下の方には十分な酸素がなく、窓もなく、天井の片すみにこぶし大の穴がひとつあいているだけだからだが、これらすべてを決めるのはかれらなのだ。窒息させられるのではと思って、叫び声を上げたくなるが、叫ばないのだ。というのも叫べば少ない酸素の蓄えをさらに少なくするからだ。それにいつかれらがまた空気を送ってくれるかわからないのだ。そしてますます無気力になっていく。

君はきっと書くさ、書くようにと命が贈られたのだからな。

これを書け、というのか、この新しいことを？だがそんなことがここで何の役に立つというのだ、君の何の役に立つというのか？

同志ファーバーは十八か月くらい込んだが、途中であきらめて自白したよ――一条の光、数立方メートルの空気のためにな。

もっと話してくれ！いいとも、君が望むならばな！

かつてのボレ商会の倉庫は一種の入口ホールになっていて、その真ん中に顔を壁に向けて立たされる。その壁には当時、今もかかっているかはわからないが、等身大以上のスターリンの肖像がかかっていた。部屋ほうきの巾もある口ひげ、その一本一本のひげが畏敬の念を込めた入念さでひかれていた。はじめはそれに気がひかれた、というのもそれは何か無気味なものを持っていたからだ。われわれは五六年一二月を書いた。その男は死んで三年たつし、フルシチョフがかれを二〇回党大会で葬ったのだ。そしてここでわれわれはお互に顔を見合った。死者と私、そして死者の方が強かった。私は頭を下げた。すると私の背後で誰かが、頭を上げろ、と言った。（略）その声はたしか聞きおぼえがあった。そして視線をスターリンの眼に向けながらこう言った。同志ウラック、私をだめにできると思わないでほしい、同志ファーバーをだめにした結果、かれはもはや人間ではなく、君たちの聞きたいことをすべて告白したファーバーのようには。それよりくたばった方がいい。

君はそれを私に書いて欲しいんだな、コリンは戸棚に突進し、扉を開き、洗濯物のうしろから黒い皮の紙ばさみを引っぱり出すと、こぶしで皮表紙をたたいた。ここだ！ここだ！ここにすべてがある！[13]

何よりもかれを打ったのは予審拘留と刑務所における経験だった、しかもブルジョワ国家のそれでなく、そのために闘ってきた国家の刑務所での経験だった、とヤンカは言うが、実際にヤンカの経験したものとはどんなものであったか。回想録にはこう書かれている。

「壁には巨大なスターリンの肖像画が懸っていた。これまで私はこんなスターリン像を見たことがなかった。三年前に死んで、その横暴なテロルをフルシチョフに弾劾されたかれが、ここではまだこの壁にその場所をえていた。（略）猜疑心にみちた目、箒より大きな口髭、短く刈った頭髪、厳しい表情、低い額、こうしたすべてがこの肖像に不気味な雰囲気を与えていた。かれの精神はここには今も残っていた。（略）私は目をそらそうとしたが、それは許されなかった。一人の歩哨がかみついた。〝立っていろ！壁を見ているんだ！〟私は肖像を見ないですむように頭を下げると、別の一人が歩み寄ってきて、わざと皮肉っぽく言った。〝頭を上げろ！〟うしろから近寄ってきたこの男の顔をみることはできなかったが、その声で、次官のエーリヒ・ミールケであることがわかった。」[14]

このあとえんえんと社会主義国家ＤＤＲの刑務所での容疑者の扱いというものが、恐らくブルジョワ国家のそれと同じく、いやそれ以上に、階級敵と見なされた者にとっては過酷なものであった描写が続く。ヤンカとミールケとの対応はこう続く。

「かれがまた間を置いたとき、私は言った。

〝（略）パオル・メルカーのような昔からのコムニストにさえ、あなた方はスパイのレッテルを貼りました。いま同じ事をぼくにしようとしているのに、ぼくは驚きません。（略）あなた方には反革命という大声が必要なのだ。ぼくにはそんな大声は必要ありません。保証しますが、今度もうまくはいかないでしょう〟これはまた言いすぎだった。左手で私の襟首をつかみ、右手でげんこつを作った。顔に一発くらうのは確実だった。私は立ち上がり、こう

言った。〝上着を放して下さい。脅迫はぼくには効かないことはよくご存知でしょうに。〟」⑮

そしてヤンカが五年近くをその中で過ごさねばならなかったバオツェンの独房についてはこう描かれている。

「〝窓〟というのもまた適切な呼び方ではない。六〇センチ×八〇センチの大きさで、二メートルの高さに曇りガラスをはめ込んだ壁の穴に一二センチ×二五センチの上げ蓋がついていた。この蓋のみが開けてもいいことになっていた。それも看守に見つかって閉じられなかったとしての話である。（略）この上げ蓋を通してのみ、ごくわずかな空気が流れ込むので、いつもこの蓋は開けたままにしておいた。寒い季節においてもである。呼吸はさもないともっと苦しくなっただろう。房の隅の汚物桶の刺すような臭気のせいばかりではなかった。独房の湿った寒さは同様に耐え難かった。」⑯「暖房の効かない独房での生活は筆舌につくし難い。絶え間ない寒気は無言の拷問である。とりわけ着る物がまったく不足していた。寒い季節に本当に暖まることができたことなどそもそもなかった。独房の内を五歩行ったり来たりし、体操をしたりしても暖かくならなかった。たとえ疲れるまで腕立て伏せをしても、それは逆効果だった。汗にぬれた下着がすぐさままた冷たくなるのだった。」⑰「私の独房と中世の地下牢とのちがいは何か？何もない。壁はうす黒く、ほとんど黒く塗られていた。くすんだ明りは朝早く消され、夕方は遅くまでつけられない。ついたかと思うとじきに消されてしまう。日中にも窓を通して日の光りはほとんど届かなかった。いつもの薄暗さは完全な暗黒にとって変わるのだった。⑱

このような劣悪な環境に置かれたコムニストはいったい何を思い、何を考えるものか、ヤンカの独白を聞こう。

「孤独と非人間的な扱い、絶え間ない寒さが、私をこのような人の尊厳を汚す状況に追い込んだ党に、もう一度従うことができるものなのかどうか、私をして絶えず考え込ませるのだった。その答えが見つかるまでは、自分自身との長い戦いを耐え忍ばねばならなかった。始めは神と世界を呪った。これまでの人生でこの惨めな独房におけるほど憤懣やるかたなくなったことは決してなかった。毎日二四時間、自分の過去と未来について考え込まざるをえなかったのだ。かれらがなぜ私をこんな風に取り扱うのか理解できなかったし、しようとも思わなかった。たとえ私に罪があったとしても、これは理解できなかったことであろう。無数の問いがどうしてもわき出てくるのだ。私の確固として組み立てられていた思想世界の全体系構造が崩壊した。私は荒涼とした瓦礫の山の前に立っていた。」[19]

2，ハイム

こうしてハイムの小説とヤンカの回想を比べてみると、細かい点にいたるまで非常によく似ていることがわかる。つまり体験した者でないと知りえない事実が小説に再現されている。これはヤンカが、ハイムの体制批判的言動に危惧の念を抱いて、ハイムに警告と忠告にやって来たことがあった。六五年一二月、第一一回中央委員会総会の直後のことである。恐らくその時にヤンカは自分の体験をかなり詳細にハイムに語ったのである。[20] 特に逮捕され、シェーンハオゼンの地下室での未決拘留からバオツェン刑務所でどう生き延びたかの詳細にわたる実体験は、ハイ

ムにとって大きな驚き、非常な衝撃であったことだろう。

ここからは筆者の全くの推測であるが、ハイムの現代史に無関心でいられない性格からいって、これは小説に書けると感じたにちがいない。というのもこの小説の主人公コリンが、スペイン内戦中から現在入院中の病院にいたるまで、くり返し書くようほのめかされる人物として構想されているからだ。ハイムは作家の本能として、これは書くべきだとの使命を示唆されたのだ、と感じたとしても不思議はないと思う。コリンが心臓発作を起すほどの精神的ストレスから脱け出すには、自分自身で決定し、自分の足で立つしかないと決心し、一種のオイフォリーの中で、スペイン内戦以来の宿題であるハヴェルカと自分を中心にした回想録を書き続けて死ぬという状況に、作者ハイムの心情が投影されていることは間違いなかろう。

ハイムはそれほどではなかったにせよ、「かれを最初の数時間の受益者の一人に選んでくれた者たちへの所属意識、そしてかれらが提供してくれた保護と暖かさに対する義務としての感謝の気持ち、部族と一族の一部であり、大いなる荒野の中の恐ろしい孤独を克服すべく一人一人を助けてくれるかれらの権力に関与しているということ、これらすべてをかれは自由の身となった今、捨て去らねばならない。いやかれはそれを自分から払い落すだろう、というのもかれがタブーに反し、部族の長老や一族の首長に配慮することなく、何か書くことを計画していると知るやいなや、かれを追放するであろうからだ。そしてかれを庇う者は誰もいないだろう」[21]という自立宣言は、多くの党員作家、芸術家、知識人に向けられているのはいうまでもない。

七〇年に『怪文書』を発表して、部族の長老や一族の首長を徹底して揶揄、批判したにもかかわらず、ビーアマンの国籍剥奪、国外追放という状況が引き起こされる。一二名の作家、芸術家の署名した国籍剥奪処分の再考を請

願する文書も状況を覆せなかった。しかしながらやはりこのビーアマン事件は、一種の分水嶺となり、人びとがより率直になり、より多く語り、そして書き始めたのはこの時からなのだ、考えるにこれは、われわれがこの国で体験しつつあり、また容易に態度表明を強いられる事態の展開に原因がある、とハイムは『コリン』についてのあるインタヴューで答えている。[22]

実際この事件以後、過去を清算し直そうとする作家たち、Ch・ヴォルフは『幼年期の構図』(七六年)、T・ブラッシュは『父より前に息子が死ぬ』(七七年)、W・ハイドゥチェックは『海辺の死』(七七年)、J・フックスは『記憶調書』(七七年)、J・ベッカーは『眠られぬ日び』(七八年)、K・ポッヘは『呼吸困難』(七八年)、R・シュナイダーは『一一月』(七九年)、ハイムは「コリン」(七九年)、S・ヘルムリーンは『夕映え』(七九年)。E・シュトリットマターは『奇跡を為す者』第三部(八〇年)そしてE・レーストは自伝『大地を貫く亀裂――ある生涯――』(八一年)、C・ハインは『馴染めぬ恋人』(八二年)『ホルンの最後』(八五年)[23]を書いて、みずからの言いたいことは言い、書きたいことは書く、もはや部族の長老たちの言いなりにはならない、という態度をはっきりと示すようになった。

七九年五月には、八名の作家(バルチュ、ベッカー、エントラー、レースト、ポッヘ、シュレジンガー、シューバート、シュターデ)が西側メディアを通じてエーリヒ・ホーネッカー宛の書簡を発表し、「政治的、批判的な作家を誹謗したり、口を封じたり、あるいはわれわれの同僚ハイムの場合のように、刑法上の責任を追及したりということがますます頻繁に試みられている。公開の意見論争も行なわれていない。検閲と刑法が組み合わされれば、批判的作品の出版は阻まれることになる。われわれは、社会主義というのは衆人環視の前で実現されるもので、秘密事項ではないと考える。社会主義の勝利と敗北、すなわちわれわれのさまざまな経験について書くことは、われわれの義

務であり権利であると思う。われわれは法の恣意的な適用には反対である。われわれの文化政策のいろいろな問題は刑事訴訟手続きによっては解決できない」[24]と訴えた。これに対し、ベルリン作家同盟は、これはＤＤＲとＳＥＤ、およびその文化政策と法秩序に中傷的やり方で反対し、ＤＤＲと社会主義に対する反共産主義的扇動に奉仕した、と非難して、バルチュ、エントラー、ハイム、ヤーコブス、ポッペ、シュレジンガー、シュナイダー、シューバート、ザイペルを党と国家の敵として同盟から除名した。

このような状況の中で『コリン』は出版されている。それではこれは時代との決着をつけようとする決算の書か、との問いに対して、決算の書ではなく、むしろある種の人間的葛藤を取り扱おうとするひとつの試みだ、とハイムは答えている。[25]確かにこの小説はスターリン主義との精算を声高に述べているわけではなく、ハヴェルカにしろコリンにしろ、またウラックにしろ、主治医クリスティーネにしろ、それぞれがＤＤＲという国の時代の波、時代の運命に巻き込まれ、自己自身との、そしてそれぞれの間での心理的葛藤が全展開されている。つまり「この社会、この時代には表面には表われず、分析されず、正しく扱われない場合には、人間を病気にするものがある。つまりあることを言い、別のことを考えるあの永遠に続く精神の分裂症だが、これは個人個人の人にとって有害であるばかりでなく、社会全体にとっても有害なのだ。」[26]その象徴的人物がコリンであり、体制側のウラックさえも、体制批判的で、のちには西側へ逃亡してしまう孫のペーターを抱えて、病いの進行に気づかず発作に倒れてしまう。そしてペーターと親密な関係にあるクリスティーネでさえも、コリンの心臓発作の原因を探求しようとして、コリンの心情に深入りしすぎて上司ゲリンガー教授に原因を求めて深く切り込み、患者を殺してしまっては元も子もない、と批判される。そしてそのゲリンガーと関係を持つコリンの妻、さらに亡命時代から苦労のかけどおしの妻が今や

病人となって、コリンと同じ病院に入っていることで、昔に書くことを命じて生き延びさせたコリンと再会し、気まずい思いをしながらも、五〇年代の見せしめ裁判を生き延びた体験をふり返らざるをえないハヴェルカ、こうした人物たちがそれぞれ互に絡みあって葛藤のドラマは進行していく。

3，ヤンカ　二、

さてそこでハヴェルカの登場する第二のシーンへ移ろう。反革命の陰謀を企んだとされるクルトの家でのある会合をコリンが回想するシーンである。

クルトの報告によれば、ケレスは激しい個人的な危機の中にあり、教会ファッシスト的、ナショナリスト的反革命の徒たちによって脅かされているばかりでなく、社会主義革命の擁護者として、プロレタリア国際主義者として状況に直面して粗雑な手出しを余儀なくされたソ連の友人たちによっても脅かされている。

コリンは一瞬筆を脇に置く。あの秋は何たるイデオロギーの大混乱だったことか！諸原則のセメントの台座にひびが現われ、疑念が数十年も争う余地なきものと見なされてきた視点に張りつき、マルクス主義の古典家たちが一晩で用ずみの古典家となり、所轄の委員会は恒常的に会議を開き、大急ぎの決議と多弁な指令で聖なる建物を支えようと試みた、というのも頭の中には異端者的考えが動き出し、しかもこれまで大丈夫だと思われてきた同志たちでさえ、我らの時代の諸要請に対して老朽化した処置で対応する必要性について、慎重に語り始めていたからだ。

その晩はしかし普通の集まりではなかった。クルトのヴィラに集まったのはそれほど慎重に選ばれた客ではなく、あれこれの理由でかれに好意を持った単なる人々だった。

およそ八人か一〇人いたうち、コリンの記憶にはっきりあるのは、政治的には賢くないわけでなく、いつも高位の同志たちとの関係を促進しようと考えている詩人ヴァインレープ、永遠に互に不和である山師たちグループの長であるピッデルケ、のちに人気を落すことになった、当時すでに不快で高慢な態度の批評家テオドーア・ポロック、最後に、当時次官というわけではなかったが、大臣が旅に出たり、長いエッセーを書いたり、演説を練ったりする時に、大臣の仕事をしていたゲオルク・ハヴェルカである。

最後に明るみに出たあの思いつきは、――当時すでにコリンはうすうす感じていて、今日では確信していることだが、クルトの空想力豊かな頭から生じたのだ。

他方ケレスの本態は残念ながらただかれの著作、哲学的ならびに文学批評的、そして歴史的著作に限られていた。しかし実際的なことになると、この偉大な、子供と紙一重といっていいナイーヴさを持つ男は、あまりにもお人好しで親切すぎたから、かれは信じたのだろう、大臣のポストならば、人はかれを一晩でその地位につけたわけだが、自分の本に書いた賢明なプロジェクトの一部を実現できるかもしれないと。そして平和と進歩の敵、ブダペストで頭をもたげた敵は、ただかれの世界的に有名な名前をかれらの忌わしい目的のために利用しようと目論んでいた、ということを認識していなかったのだろう、とピッデルケ。

ある同志のそれをナイーヴだと解釈は恐らくできないだろう、もし彼が党の呼びかけに従い、党によって彼に割り当てられた職務を引き受けているとしたら、とポロック。

クルトは、自分にとって肝心なのはケレスの運命である、自分が残念なのは、精神の力と機能の力との間をケレスが決して正しく区別する仕方を知らなかったことだと。

いつ実行しようか、個人的行動、誘拐とも言えるな、せいぜい小市民的ロマンティシズムだ、とクルト。もし誰か行かねばならぬとして、十分経験のある者だな。同志ハヴェルカ、明日の昼に旅の準備ができるか？

そして一年か一年半後、クルトは頭を絹の枕にのせて横たわっていた。ガンが蝕んでいたのだ。

ハヴェルカを彼は遣ったのだ、火の中へ。実際は彼らのうちの一人ではなかった唯一の男を。そして再びハヴェルカはコリンの代りに代替服役をしたのだ。「あの旅行は行なわれなかった、トップの所で阻止されたのだ。クルト家での相談の一日後に。のちに明らかになったように、その計画のための何らの必要性も生じなかったのだ。ケレスは他の道へ逃れたからだ。」[27]

ハンガリーでの人民蜂起、ゲオルク・ルカーチの役割と評価、かれを助け出そうと相談する知識人たち、それぞれの人物についた修飾語や発言により、クルトがヨハネス・R・ベッヒャー、ダニエル・ケレスがゲオルク・ルカーチ、ヴァインレープがシュテファン・ヘルムーリン、ピッデルケがヘレーネ・ヴァイゲル、ハヴェルカがヴァルター・ヤンカであることは容易にわかる。

小説ではこのように全員がクルトの別荘に集まって協議したことになっているが、ヤンカの回想によればそうではない。アンナ・ゼーガースに呼び出されてかの女の家で、ルカーチをブダペストの混乱の中から見つけ出し、ベルリンへ連れてくるようにヤンカは頼まれたのだ。そしてゼーガースが電話連絡したベッヒャーは、その夜直ちに

ヤンカを文化省に呼び寄せ、そこでブダペスト行きの詳細がベッヒャーによってお膳立てされた。しかし翌日ハンガリーへ出発することになっていたこの企ては、ウルブリヒトにより拒否される。[28]

問題はこのブダペスト行きの企てが、「この裏切り者のルカーチ、すでに長い間国際労働運動の戦列の中で仮面をかぶり、帝国主義の手先として働いていたルカーチを、そこの被告席に座っているヤンカという名の男、ドイツ労働者農民国家の裏切り者であり、ルカーチと同様、共産主義者に変装していたその男はベルリンへ連れてきて、DDRの反革命の精神的鼓吹者にしようとしたのである」[29]と検事総長のメルスハイマーによって、ヤンカの裁判の席上、声高に宣言されたとき、その企てを言い出した本人ゼーガースも、その企てを支持し、お膳立てまでした文化大臣ベッヒャーも、その間の事情を知っていた人びと、エドゥアルド・クラオディウス、ヴィリー・ブレーデル、ヘレーネ・ヴァイゲルらもみな口をつぐんでしまったことだ。

特に大臣ベッヒャーとゼーガースの罪は重い。ベッヒャーはひと言でいえば自分の保身のためには、自分の行った言動と反対のことを主張して憚らない性格の男だ、という事実がヤンカによって暴露された。ヤンカの逮捕について「このハーリヒ＝ヤンカスパイ組織を一掃したのが自分でなくて、党であることを残念に思う」[30]とまでベッヒャーは言うのだ。「虚栄心が強く、名誉欲旺盛で、堕落し、友人たちを裏切りつつ、自分の詩を差し止めるモルヒネ患者ヨハネス・R・ベッヒャーの肖像はゾッとさせるものがある」（ラダッツ）[31]

アンナ・ゼーガースはどうだったか。「かの女こそは共同責任を免れなかったはずである。高名な女性であり、その発言が真実に手を貸すことができたという理由からだけでもかの女には責任があった。少し勇気を出したところで、かの女の名声が揺らぐこともなかったであろう。ウルブリヒトといえども、かの女を逮捕したり、かの女に

嫌がらせをすることはできなかったであろう。そういうことをかの女はすべて知っていた。にもかかわらずかの女は沈黙していた」[32]のである。

ソ連及び東欧諸国での見せしめ裁判というのは、そもそも本来の裁判の体をなしておらず、もともと決められた犯罪の筋道に当局にとって好ましくない人物をあてはめていくだけの猿芝居であったことは、ヤンカの回想を読むだけでもわかる。ヤンカ自身、メルスハイマーが約一五ページにわたってルカーチ集団について演説を読み上げた際に、「わたしはこれを真面目にとるべきか、滑稽ととるべきかわからなかった」[33]と述べている。「弁護士は最終弁論で無罪を主張したが無駄であった。裁判所は弁護士の申請をすべて無視した。大筋はそういうものだった。党が指示を与えるとき、裁判官はそれに従うからである。」[34]

こうした裁判の本質からすれば、ヤンカの申請した証人、ベッヒャー、ゼーガース、クラオディウスらがメルスハイマーによって拒否されたのは当然のことだ。当局が認めている権威を持つ者のうちで一人でも、その権威を持ってこの裁判に異議を唱え、ヤンカ擁護に回っていたならば、事態はまた違った局面へと動いたであろう。党からさまざまな特権を享受している者は、本業に精を出す以外に、世のため、人のために尽くさないでどうするのだ、コムニストとしてその覚悟なくして世の権威など引き受けなければいいのだ。

しかしその道徳心は、党は常に正しい、だから常に党の言うことに従っていれば間違いはない、という自己判断停止の行動となって現われる。そこがかつて存在した社会主義の、スターリン主義的恐ろしさである。それは文化大臣を、スターリン賞作家を、作家同盟議長をも沈黙させるのだ。この点についてハイムは小説の主人公コリンを肉体的というよりむしろ心理的、精神的病人と設定することによって、はっきりと問題を指摘してみせた。すなわ

ちコリンには、ベッヒャーやゼーガース、クラオディウス、いやそればかりかヤンカ、さらにハイム自身の分身の役割がふられている。コリンもまた法廷の傍聴席にすわって沈黙していたからだ。

そこまで書かれたコリンの回想録を読んだ主治医のクリスティーネは、前夫の外科医アンドレーアスに、人は自分が何かをしなかった、例えば言うべき時に沈黙したことで病気になりうると思うか、と尋ねる。アンドレーアスは答える。「為すべきことをしなかった怠慢の罪は最も簡単に排除することができる。自分の魂の治癒のために緊急に必要だったことをするのを怠った者が誰でも病気になるとすれば――党の半分は精神科にいるだろうさ」[31]と。これらの事情は小説では次のように描かれている。

ハヴェルカがクリスティーネを訪ねてくる。ペーターの逃亡と、ハヴェルカと彼女の関係について聞かれた、と知らせに来たのである。ペーターの計画について何も知らなかった、との証言を守ること、連中は自分の側の人間ではないと自分に言い聞かせること、これが彼の忠告である。そして自分の経験を語る。

傍聴人に青白い顔を見せないために紫外線の照射を受けること、逮捕時の背広が今やぶかぶかであること、私が陰謀グループの首魁だったとされたこと、出される質問、要求される告白、ただ協力する時にのみ寛大な提案、頑固でいると恐ろしい脅し、これらは余りにもはっきりしていたし、告発はしかしながらあまりにも恥知らずにも本当とは思えず、ばからしくも矛盾だらけ、容易に反論可能であることなど、夢にも思わなかった。半ダースの政治的ディレッタント、唯一の職業革命家である私が、政治局をその第一書記ともども失脚させることを計画したことになっていた。しかも確たるプランもなく、取り立てて言うほどの党の地位との結びつきもなく、大衆に基盤もな

く、ただかれらの一人が疑惑の過去を持った、しかし野心はある重症のノイローゼ患者が西ベルリンの放送局を通じて、共和国の住民に向けた呼びかけに応じて、これら陰謀者たちが党と政府のトップに据えようと意図していた男は、よりにもよって、体と魂の壊れた、どんな行為も不能な同志ファーバー、ぴったり一年前に恩赦で釈放されたファーバーである。あまりに多くのシニシズムとばからしさに、私には本当のことと思えず、何時間も、何日も、何週間も、何か月も独房の暗闇の中で、実際私は、自分に何らかの罪を探そう、かれらが用いた構想を受け入れようという誘惑に陥った。そして私がひどい病気になった時、事は突然また簡単になり、ただひとつの考えに私は取りつかれた——私が特別法廷へ移送される日に、あなたの患者、同志ウラックに伝えたのと同じ考え、君たちは私をだめにすることなどできはしない、と。

スターリン時代の茶番劇が再導入されたのだ、しかもとっくに古びた衣装を着て、とっくに使い古された舞台効果をともなって。これはドイツ人の想像力の無さなのか、警察の頭脳の悪さなのか、それとも意識的なデモンストレーションなのか——誰がここでは権力を持っているか、古き良き規則はまだ有効だ、あのモスクワのデブが発表したことなんてどうでもいい、ということを君たちに教えてやろう、というのだ。

ファーバーに関しては、突然彼が消えた時も、情報を手に入れ、何とか助けようとした。釈放後、職を、弁護士を世話してやった。私が刑務所に入っている間に死んだが、その彼が私の法廷でどのような態度を取るか、私は緊張していた。

ファーバーは証言した。私がつねに、どこにおいても、スペインで、亡命の間、この国の建設期においても、模範的なコムニストであったことを。そしてまたあの日の午後、シェーンハオゼンの私の家に集まった客の名を挙げ、

議論があったことを認め、その議論では第一書記の失脚の可能性についても語られたことを一般的に認め、その提案が誰から、すなわち私、ハヴェルカから出たことを認めたのだ。

私にはすべてが高度に現在なのですよ、ドクター・ロート、その詳細についてもね。

コリンは証人として登場したんですか？いや、彼は全裁判中、傍聴席の二列目にすわっていました。

ハヴェルカはさらにこうも言った。心理学者なら、一度調べてみるかいがあるだろう、なぜ我々は社会主義においてもなお、いいなりになる人間が必要なのかを。ある日びの流血の騒ぎの原因を、自分の政権のメトーデに求めるのはより自然なことであったろう。それなのにその責任をインテリたちに押しつけてしまった。その中にあの小さな男が際だった贖罪の羊として提供されたのだ。検事総長はケレスを強引に暗い陰謀家、以前からの社会主義の敵に仕立て上げようとした。私をより強力に有罪にしようとするためにのみ。さらにケレスは、党と政府への信仰を破壊するために、文化創造者たちの信頼のなかに忍び込んだことになり、我われのソ連の友人たちの文化政策上の原則に対して疑いの種をまいたことになった。

そして検事総長は人差し指で私を差し、そしてこの男が、ブダペストの反革命の知的張本人、裏切り者ケレスをここベルリンへと連れてくることを計画したのだ。かれを我われ共和国の反革命の精神的親玉とするために！と叫んだのだ。

そして最も腹立たしいことは、私が実際にブダペストへ行き、ケレスを連れてくることになっていたことだ。ただ全く別の理由からと、全く別の人びとによって指示されて。そしてこれらの人びとのうち二人は法廷にすわっていた。ピッデルケとコリンだ。コリンは私にこう言っていたのだ、君が私を必要とする時にはいつでも役に立つよ、と。[36]

4，メルカー

ここでもう一人ＤＤＲスターリン主義の強圧に圧し潰された人物が登場している。ユリウス・ファーバーである。ファーバーは陰謀者たちが党と政府のトップに据えようと意図した男とあることから、かつてのＳＥＤ政治局員パオル・メルカーであることが知られる。

メルカーは戦前からのドイツ共産党員で、二六年から中央委員、政治局員、モスクワの国際レーニン学校、三七年から書記局員、フランスへ亡命、ＫＰＤ指導部、四二年メキシコへ亡命、「自由ドイツ運動」書記、四六年ドイツへ帰還、ＳＥＤ中央委員会書記局員、政治局員、農村省次官などをつとめた人物だが、五〇年八月二四日、「ノエル・フィールド事件」に関連してＳＥＤから除名され、五〇年から五二年までルッケンヴァルデの食堂支配人、五二年十二月一日逮捕され五五年三月の秘密裁判で八年の懲役刑、五六年二月釈放、のちにケーニヒ・ヴスターハオゼンの独ソ友好協会名誉議長、六五年五月三一日に死亡している。[37]

このメルカーについてヤンカは回想録の一〇数か所で触れているが、ヤンカはメキシコ亡命時に共に「自由ドイツ運動」ラテン・アメリカ委員会で活動し、ドイツ帰還後も政治局員メルカーの個人的協力者となり、資料の手助けをし、演説文を書き、論文を練り上げ、本や雑誌を読んで内容を報告し、通信文を処理したりして、長いこと緊密な友人関係にあったからである。

特に「証人たち」の章の三分の二以上およそ一六ページがメルカーの分に割かれている。まずリヒテンベルク拘

置所でメルカーと対面するところから始まる。「かれの証言を聞いてますます私は驚き、自分の耳が信じられなかった。かれは要求されたとおりに返答し、ハーリヒと私にきわめて不利な証言をした。それもまるですべてを暗記しているかのようにしゃべった。（略）メルカーは明らかに、私の逮捕の前に約束したことをすべて忘れてしまっていた。」[38] メルカーは、ヤンカが万が一ハーリヒ事件に関係するような場合には、ヤンカと話をしたことについては何も証言しないでくれ、とヤンカに頼んでさえいたのだ。

この昔からの同志で友人がもたらした失望感はヤンカを言うに言われぬ意気消沈と疲労を感じさせることになった。その友人のために長いこと働き、無私の態度で尽力してきたヤンカは回想する。

五〇年にピークとウルブリヒトによってたきつけられた友メルカーのキャンペインにヤンカは断固反対し、徹頭徹尾メルカーを擁護する。メルカーが党から除名され、ルッケンヴァルデへ追放され、五二年に逮捕されるまでかれを物質面でも道徳面でも支える。三年たってもかれの妻さえもかれの運命については何もわからないので、弁護士を仲介してやり、ソ連共産党第二〇回大会の少し前に、メルカーが最高裁で八年の懲役刑を受け、ブランデンブルクへ移送されたことを知る。五三年にシュタージにメルカーの件について訊問されたとき、かれに有利な証言をし、法廷で嘘の主張の誤りを証明する用意があると宣言する。そうならなかったのはスターリンが死んだからである。第二〇回党大会後、理由もなく秘かにルッケンヴァルデへ釈放されたとき、メルカーはヤンカ夫婦に拘留中の体験を話す。ヤンカの知るかぎり、すべてを話してくれたのはヤンカ夫婦だけである。他の人をもはやメルカーは信用していないからだ。それに本当のことを聞きたいと思った同志たちは、ヤンカ夫婦以外にいなかったのである。そして勇気をなくし、精神的に動揺したメルカーに法的名誉回復を成し遂げさせたのもヤンカ夫婦だけだった。「こ

れらすべてはもちろんウルブリヒトに知られずにはすまなかった。そんなわけで私が遅かれ早かれこのことでひどい目に会うことになるのは目に見えていた」[39]とヤンカは述べている。

メルカーに関する最初の虚偽の主張は、メルカーがノエル・フィールドのスパイだ、というものだ。この嘘のばかげているところを理解するためには、何のためにこの名前が出てきたかを知らねばならない。アメリカ人ノエル・フィールドは西側の亡命から帰ってきた指導的党役員や知識人を締め出すために、つまり首を締め、射殺し、監獄に入れ、少なくとも排除するために、長年にわたっていいように利用されたのだ。しかもただスターリンとかれの取り巻き連中が、ピーク、ウルブリヒト、マーテルンなども含めて、西側亡命国でヒットラー時代を生き延びたすべてのコムニストは、資本主義のスパイになったと考えていたから、というのである。[40]

フィールドとの関係は、多くの者にとって致命傷となった。当時の状況にあっては、ソ連国家保安省が真相を知っていたにせよ、知らなかったにせよ、スパイ・フィールド説をでっち上げたとしてもおかしくはない。冷戦はすでに始まっていたからだ。そしてそれを各国ののスターリン主義者たちが党内闘争に利用した。ウルブリヒトも西側亡命者たちを排除して、自らの権力基盤を確立したかったに違いない。その犠牲者の一人がメルカーだった。メルカーの胸中をヤンカはこう推測している。

なぜかれは抵抗もせず屈服したのか？かれは自分の無実を確信していたし、どこへ逃げても安全ではないことを知っていた。ヴィリ・ミュンツェンベルクを見よ、トロツキーを見よ。かれはきわめて規律のある忠実な党員だった。指導部の第一人者の役など自分につとまらないと思っていたし、説得もされなかっただろう。自分自身をわきまえ、よき第三番目の男ないし第四番目の男と心得ていた。[41]

「肉体的に衰え、心理的に疲れ果て、地下牢でくたばるか、あるいは罪を告白するか、恩赦を期待して、ひょっとしてもう一度日の目を見るか、自由を再び体験するかの選択をせまられて、メルカーは崩壊した。かれは何重ものスパイ（略）だと自白した。要求されたとおりにである。

五五年に最高裁で秘密に、弁護人もなしで行なわれた裁判ではもはやフィールドの名には触れられなかった。メルカーは相変らず、フィールドがとっくに、また自由の中で生活していること、スターリンとベリヤが死んだことを知らなかった。三年にわたる未決拘留の間、かれは新聞ももらえず、面会者とも接見せず、弁護士とも面会しなかった。判決後かれはブランデンブルク刑務所へ移送されたが、そこでもまた独房拘留だった。だいぶあとになってようやく、なぜ大裁判が行なわれなかったかを知った。（略）ウルブリヒトにとってはこの転換は重大な打撃であった。（略）私がせき立てたのでメルカーは五六年半ばに再審手続きを申請した。同じ構成の、同じ法廷が今やかれを無罪とせねばならなかった。（略）かれに罪をきせた証人たちは責任を問われず、この裁判をひき起した政治局のメンバーはその官職に留まったままだった。誰も自己批判せず、沈黙を守った。誰もメルカーの強制自白に責任を取らず、中央委員会では、人的な修正も行なわれなかったのである。」[42]

ウラックとコリンの対話から。

「ファーバーは悲劇的人物だが、これはかれのせいでもあった」「かれの罪は、かれがそこに存在したこと、ありのままのかれだったことだ。われわれがかれに着せた上着用に裁断されたようなものだった」「トロツキーのような人間からはトロツキー的人間しか生じない」「そんな裁判を実行することが、楽しかったと思うか？階級闘争は

階級闘争だ」「それはある意味で非人間的だ」「われわれがすることのすべては、人間性の世界を創造するためになされる、ということを君は無視している」「ファーバーの判決は正確だった。秘密裁判で秘密判決。裏切り者、スパイ、変節者と。何が本当に悲劇的だったかわかるか？すべてが突然無意味になったことだ。突然何かが変ってしまった。時間だよ。それが弁証法だ。弁証法は君の中でも発火装置の中の時計のようにチクタクやっている。君は最良の装置を持っているかも知れないが、にもかかわらず、いつ突然すべてが変ってしまうか、君は決してわからないのだ」「しかし同志ファーバーに簡単に、これは誤りだった、すまない、家へ歩いて帰ってくれ、なんて言えなかった。それにわれわれはかれにそのかわりに何をしてやれたか、反響なし、世間の驚きもなし、企業からの憤慨した決議もなし、ただ形式的儀礼のみ、これこそ同志コリン、悲劇というものさ。」[43]

これが長年の協力者であり、親身になって面倒を見てくれたヤンカを裏切って不利な証言をした人物と、ＤＤＲ社会主義のスターリン主義的裁判の実際である。ヤンカがこれほど紙幅をメルカーのために割いているのは、メルカー個人に対する怒り、恨みよりもむしろ、メルカーのような人物を裏切りへと追い込む政治的権力機構そのものばかりでなく、それに乗っかって自らの権力保持、保身にためらいもなく手を染めるＳＥＤ指導部の個人的犯罪を世間に暴き出そうとしたためであろう。一条の光、数立方メートルの空気のために自白した、とメルカーを簡潔に要約した小説では、かれは次のように描写されている。

同志ユリウス・ファーバーはプリーグニッツのレストラン「赤い塔」の主人をしている、という匿名の手紙にひ

かれてコリンは、マーク・ブランデンブルグの県都プリーグニッツを訪れる。かれと知り合ったのはル・ヴェルヌの収容所で、かれは党の非合法指導部の一員だった。メキシコで再会したが、緊密な協力関係はもちろんなく、ヨーロッパへ帰還する船上で近しくなった。二つの労働者党の統一後、彼は農業問題と栄養担当の政治局員になった。その後数回役所に彼を訪ねている。ところが今は食堂の亭主だ。党大会で締め出されるファーバーの描写。党第一書記が、党内の階級敵のスパイとしてかれの名前を読み上げたのだ。かれは反論しない。ショックからか、規律ゆえか、それとも一人の人間が、年老いた、功績ある同志が無実のまま糾弾され、弾劾されるのを許さないであろうという党に対する信仰からか。それとも沈黙したのは罪の告白を意味するのか、その根拠とされたのは、かれがマルセイユで、のちにはメキシコで例のアメリカ人ノエル・フィールドと接触があったということだ。

訪ねあてた食堂でファーバーは、同じようなレザーのコートとを着た十人ほどの男たちにののしられる。労働者を裏切った男はそういう顔をしているのか、シオニストのスパイめ、どこにドルを隠したんだ、本当の事を言うんだ、階級敵にいくら払ってもらったんだ。ファーバーはコリンに、帰った方がいい、さもないと事件に引き込まれるぞ、と言う。コリンは逃げ出す。[44]

5，ハーリヒ

さて「証人たち」の残り三分の一は「五七年三月二七日に記録されたシュタージのハーリヒの〝証人証言〟が、この年老いたコムニスト（メルカー）をして、かれの昔からの友人ヤンカを裏切らせることになった材料を提供し

たことは確かだ」[45]と、ヤンカの言う〝証人ハーリヒ〟に割かれている。

ハーリッヒ事件に関しては以前にその概要に触れたが、[46]それは単なる政治的陰謀事件ではなく、思想的には改革派共産主義の流れの中に位置づけられるもの（W・レオンハルト）であった。しかしそのハーリヒの行動については、自分の思想の拡大、支持を求めるのに急であるあまりに、ウルブリヒトが象徴するDDRスターリン主義に対抗する陰謀事件にしては、余りにも幼稚、お粗末すぎたといえるだろう。ソ連共産党第二〇回党大会以降の東欧諸国での非スターリン主義の動きから、DDRでも同様の動きがあってしかるべきという思いは理解できるにしても、スターリン主義的体質というものを過小評価すべきではなかったろう。これがそう簡単に揺らぐものではなかったことは、ウルブリヒト体制が七三年まで続いたことを見てもわかる。

戦後ベルリンで哲学と文芸学を学んだハーリヒはこの頃、五〇年から五四年にかけて兼任でアオフバオ出版社の原稿審査係として働き、五一年にはフンボルト大で学位（文学博士）を取り、五四年まで哲学史講座の講師を委嘱されている。また五三年から五六年まで『ドイツ哲学雑誌』の共同発行人兼編集長。五四年から五六年まで原稿審査委員長代理をつとめるなど、華華しい活躍をしており、女性にもてた若きインテリ（一三年一二月九日生れ）としては得意の絶頂にあった。

東欧諸国の非スターリン主義化の動きに刺激され、五六年に党、国家、社会の急激な民主化とドイツの社会主義的統一のプログラム草稿を書いて、五六年一一月二九日に逮捕され、五七年三月九日に最高裁で〝国家に敵対する陰謀グループを形成した〟かどにより、懲役一〇年の判決を受けている。[47]

「『シュピーゲル』（五六年一二月一九日号）によって広められたハーリヒの〝共産主義国家の現在の土台を疑問

視することのできたソ連占領地区の唯一のインテリ〟という伝説は、ＤＤＲにＳＥＤに対抗する理論的根拠のある運動が展開していた、と西ドイツの世論に見せかけるのに役立った」[48]とヤンカは回想している。つまり理論的根拠のある運動と呼べるようなものは存在していなかったのである。

スペイン内戦で大隊指揮官までつとめた歴戦の闘士ヤンカにしてみれば、頭でっかちのインテリが民主化のプログラムを書いたくらいで意気がって、事を慎重に進めるのではなく、一人で西のＳＰＤの東部局の代表たちと会って支援を要請したり、ハンブルクへ飛んで新しい新聞発行の可能性をさぐったり、ソ連大使のプーシュキンに会って影響力の行使をたのんだり、あるいはポーランドへ飛んでアダム・シャフに会おうとしたり、やることが派手で、党指導部の失脚をねらうにしては、作戦の体をなしていないと思ったことだろう。

しかもヤンカは肝心のプログラムも読んでいないし、ましてや三年間の拘留で心身ともにボロボロになったメルカーを、ウルブリヒトにとってかえるなどということは想像外であったにちがいない。もちろんハーリヒにしてみれば、陰謀を企てているなどという意識は皆目なかったであろうから、自分が呼びかければＳＰＤもポーランドの同志も、国内のインテリたちも立ち上るであろうと自惚れていたのかもしれない。だから呼び出されてのこのこと敵の大将ウルブリヒトの所へ話し合いに行ったりしているのだ。しかもハーリヒがウルブリヒトを大して尊敬せず、からかいの対象にしていることは誰でも知っていた。密告が大はやりのＤＤＲであるから、ウルブリヒトがそのことを聞き知っていたとしても不思議はない。あれこれ文句を言う上に、自分の地位まで危くするようなことまで考えたからには、とウルブリヒトの堪忍袋の緒が切れたのだ、とヤンカは言う。[49]

ヤンカに八九年の転換の後に送られてきたシュタージの資料によれば、ハーリヒの行動はＩＭによってウルブリ

ヒトのもとに逐一報告が入っていた、[50]とのことであるから、ハーリヒはウルブリヒトの手の内で躍らされていたのである。すなわちハーリヒを泳がせて、体制批判派の面面を一網打尽にしようと手ぐすねをひいていたわけだ。

それにヤンカにとってなお気に入らなかったのは、ハーリヒが自分の裁判であっさりと自らの有罪を認め、あまつさえシュタージが早めに逮捕してくれたから死刑にならずにすんだ、シュタージに感謝の意を表する、とまで述べていることだ。[51]そしてヤンカの裁判の証人として出廷したハーリヒは検事総長メルスハイマーの質問にも完璧に返答しているのだ。ヤンカと他の三人ユスト、ツェーガー、ヴォルフが終始一貫して罪を認めなかったのにくらべて何と違うことか。こうしたハーリヒの態度、行動をハイムはどう評価しているかは、小説の数行によってわかる。「しかも確たるプランもなく、取り立てて言うほどの党の地位との結びつきもなく、大衆に基盤もなく、ただかれらの一人が疑惑の過去を持った、しかも野心はある重症のノイローゼ患者が西ベルリンの放送局を通じて…」[52]

もちろんハーリヒにしてみれば、これらのヤンカの批判に対して黙っている訳にはいかなかった。九九年に『血統証明書』[53]と題する自伝の試みを残している。その三分の一は編者トーマス・グリムとの対話録であるが、グリムのインタヴューに答えてヤンカの『・・・困難』に激しく反論している。

ハーリヒからいえば、五六年にＤＤＲにハーリヒによって組織され、指導されたという反対派のグループ形成という意味でのハーリヒ・グループは全く存在しなかったが、しかし恐らく、ハーリヒを二番手とするヤンカ・グループは存在したと言って、このグループにハーリヒの名がついたのには四つの理由があるとしている。[54]

第一に、自分は政治的未経験と未熟さから容易に捕えられるスキを見せてしまったのに対し、海千山千の党活動家にしてスペイン内戦の将校ヤンカははるかに戦術的で熟練しており、慎重に行動した。第二に、ハーリヒの名前

の方が世間には職業がらヤンカよりはるかに有名だった。第三に、ハーリヒの名前を前面に出すことにより、このグループの断罪が党内インテリたちの反対派志向部分に警告の一発となった。第四に、ヤンカによってたくらまれたグループの主たる計画は、ウルブリヒトを党首から失脚させ、この職にメルカーをあてる、というところにあった。この計画があったが故にこのグループの存在は、クーデターの現実的危険を呼び起こしたのだ。

要するにハーリヒは、自分はインテリの家柄に生れた生粋のインテリであるから、ヤンカのような労働者上がりとは違う。それ故批判的インテリを片づけるのに自分の名前が使われた、という論理である。論理としてはそのとおりかも知れないが、実際にはメルカーがトップに立てる男でなかったことは、ヤンカ自身よく知っていた。確かにアオフバオ出版社には、体制のスターリン主義的やり方に批判的な作家、芸術家らが出入りし、活発な議論がかわされ、しかも文化大臣ベッヒャーもこれを認めて、大いにやってくれと奨励さえしていた。こうした状況はウルブリヒトの目にはペテーフィ・クラブの蠢動と映ったとしても無理からぬところだろう。多くのライヴァルたちを冷酷にも排除してきた、こちらも海千山千のウルブリヒトにとって、シュタージに躍らされているハーリヒらヒヨッ子どもを片づけるのは朝飯前の仕事だったはずだ。

ハーリヒのヤンカに対する個人的関係は、「互に崇拝していたが、お互の欠点と弱点を見逃していた。ヤンカは私の中に、党の若い世代の天才的頭脳を、すべてを分っており、知っていて、読んでいて、通じており、判断でき、とりわけ理論的にはマルクス主義者としてルカーチにのみ及ばない男を見ていた。ヤンカは私の人間的未熟や未完成、時折幼児に近いナイーヴさや政治的経験の完全なる不足を見ていない。また非合法時代から私にはりついている冒険心を見ていない。それに一番わかっていないことは、私が誇大妄想に傾くことがあることだ。」[55]

自分でも認めているように、他人の感想を推して言うのに、天才的頭脳だとか、マルクシストとして及ばないのはルカーチだけだ、というような思い上った態度は、まさに誇大妄想であろう。ハイムが「ノイローゼ患者」と評したのには理由があったわけだ。

ヤンカはハーリヒの人間的未熟や政治的経験の無さを見抜けなかったのではない。かれのキャリアからいってそんなことは考えられない。わかっていたからこそ、ハーリヒと共同でウルブリヒトを倒そうなどとは本気になって考えなかった。だからこそ逮捕され、ハーリヒの巻き添えをくったと思ったからこそ、最後までその嫌疑を断固として認めなかったのである。

ところがハーリヒに言わせると、こうした見方は事実に反しており、ヤンカが全否定の態度に出たのは、ハーリヒの名誉を傷つけ、孤立させるためである。さらにシュタージに対して感謝の意を表したことには、君らは監視下にあったのだから、もう数週間過ぎていたら死刑判決に価しただろう、芽のうちに摘んでやったのだから喜んで感謝しろ、と言われたからだ、という。[56] そして次のようなアナロークを持ち出す。ルカーチだってあれ以上泳がせられていたら、ナジのように処刑されただろう、反革命の精神的親玉だが、家へ帰って「美学」でも書いていろ、と。私の場合も同じで、最悪のことは君の才能が奪われ、哲学、美学、文学史の問題がわからなくなってしまうことだ、生きのびろ、拘留中でも学問上の仕事はさせてやる、と。[57]

やはりこの言い訳には、ハーリヒの政治的未熟さと自己過大評価、自惚れ心がもろに表出されている。これでは幼児が母親に「いい子にはいい物あげるから、本当のこと言いましょうね」とおだてられているのとどこが違うのか。シュタージに才能を認められたのがそんなにうれしいのか、自分の才能が失われるのがそんなに惜しかったの

か、それならその後ルカーチに匹敵する業績を残したというのか、という声が聞えてきそうである。

事実グリムは、ハーリヒの自己正当化に関し、ハーリヒが党機構（シュタージ）に大いに理解を示しているが、その機構がウルブリヒトによって操作、指導されているという事実を見逃しているし、この機構によってある時は犠牲者として、ある時は自己告発者として利用されているハーリヒは、いったいスターリン主義的体制の犠牲者なのか、共犯者なのかわからない、と疑問を投げかけている。[58]

ハンガリーのライク、スラーンスキーやシモーヌ、ブルガリアのコシュトフらが身におぼえのない罪を告白して処刑されたことを考えれば、ウルブリヒトの失脚を謀り、ＳＥＤを民主化し、西のＳＰＤと呼応して民主的社会主義的統一ドイツを造る構想を本気で実現しようとするなら、命をかけるつもりの覚悟が必要であったろう。少しくらいおだてられたからといって、自分の才能と命が惜しくなるようでは才能が泣くというものだ。構想が実現しなかったのを悔しがったのならともかく、早く止めてくれて助った、などとシュタージに礼を言うようでは、自らの書いた構想それ自体、そしてその構想実現に携わった人びとを侮辱したに等しい。人びとの軽蔑を買ったとしても致しかたあるまい。要するに、自分の命が惜しかったのだ、とだけ言えばいいのだ。あれこれ自己正当化の理屈を言う必要はない。つまるところハーリヒの個人的自己恋慕と自惚れ（グリム）[59]に帰するのだから。

しかしハーリヒの名誉のために、ここでかれのまとめた構想、いわゆるプラットフォームを少し検討しておこう。転換後にウルブリヒトの遺した書類の中から発見され、九三年に初めて公刊されたものである。[60]全体が三部九章で構成され、タイトルは「社会主義への特殊なドイツの道のためのプラットフォーム」（五六年一一月草案）となっている。

まず前文として「党路線の堅持、ＤＤＲの社会主義的民主化の闘争と、民主主義と社会主義、国民主権と独立そしてすべての諸民族との友好を基盤とするドイツの平和的再統一のための闘争におけるＳＥＤの課題について」を表題にかかげ、ソ連共産党第二〇回党大会以降の中国、ポーランド、ハンガリーにおける国際労働運動の歴史はＳＥＤに、その全作業を点検し、過去に犯された誤りを徹底してマルクス主義的に分析し、そこで得られた新たな認識から真剣な理論的実践的結論を引き出すことを義務づけているが、ＳＥＤ中央委員会の支配的勢力によって、これらの義務は明らかに誤って認識されているので、党の新たな方向づけに関する以下の思考と提案を、中央委員会ならびに県や郡の指導部に送り、これらの提案を党中央委員会総会で徹底した討論の対象とすることが必要である、とこの構想の目的、内容、方法が簡潔に述べられている。この構想の要点は右の前文につきるが、その内容を少し見ておこう。

第Ｉ部ＳＥＤの改革では、ベリヤ一味の犯罪に関与した党と国家保安組織の指導的活動家の排除（Ｉ章３ｅ）、スターリン時代に不当に党から除名されたり、地位を追われた活動家、党員の完全な名誉回復と地位の回復（３ｆ）、官僚主義、派閥意識、管理的処理方法、傲慢な態度との戦い（Ⅱ章１ｂ）、党の指導的役割の保持に際しては、党と国家機構、党と大衆組織、企業指導部の権限の明確化（Ⅲ章１）、社会主義的民主主義の官僚主義的で暴力的歪曲の歴史的、社会的原因の解明とこれらの堕落が人民民主主義諸国とＤＤＲの社会主義建設に負わせた重大な誤りの分析（４ｂ）、四八年以降のユーゴスラヴィアの兄弟党の政策、五三年六月のＤＤＲ民衆蜂起、ソ連共産党第二〇回党大会、五六年六月のポズナニ民衆蜂起、中国共産党第八回党大会、ポーランド統一労働者党中央委員総会、一〇月のハンガリー民衆蜂起は、スターリン時代の官僚主義とその誤った、国民に敵対的やり方に対する労働

者階級の革命的闘争の一環であったという事実の解明（４ｅ）、それぞれ異った国の特殊な国民的諸条件と伝統を考慮して、社会主義と共産主義への特別な道の多様性に関するレーニンのテーゼの包括的仕上げ。これに関してＡ・アッカーマンの四六年の論文「特殊なドイツの道」に関する議論（４ｏ）、ドイツ労働者運動再統一の明確なプログラムの段階的提示（12）、

第Ⅱ部は社会主義への特殊なドイツの道のプログラムである。スターリン時代の違法の公式な清算（８ａ）、新刑法典の創設（ｃ）、国家保安省の解体（ｄ）、文化省、人民教育省、大学書記局、文学出版局の解体と新たな、文化省の創設（９ａ）、学問的教義と研究、それに芸術と文学活動の完全な自由の再生（ｅ）、あらゆる形の検閲の廃止（ｉ），新聞とラジオは、自由な意見表明や下からの批判のフォーラムとして自由に使用される（10ｃ）、国家人民軍の解体(11ａ)、ドイツ再統一のための諸条件――再統一ドイツはどの軍事同盟にも属さず、中立的立場を守るか、全欧州安全保障体制に組み込まれる（Ⅱ２ｈ）、再統一後の国連加盟（ｅ）、平和条約締結後一年間にすべての外国軍隊の撤収（ｍ）、

第Ⅲ部緊急措置として、ＳＥＤ中央委員会総会の招集、党の改革プログラムと社会主義への特殊なドイツの道の議論（１）、新しい政治局の選出と旧指導部の政策の仮借なき批判（２）、政府の改組と党機構のウルトラ・スターリニストの浄化（４）、社会主義への特殊なドイツの道のプログラムのソ連共産党による承認（５）。

非スターリン主義の徹底と、ドイツ独自の社会主義の追及、東西呼応した社会主義による再統一というこの構想に実現のチャンスは、結局与えられることなく時間は過ぎ、八九年の壁の崩壊に至るまで根本的な状況の変化はな

かった。九〇年の再統一もハーリヒの思い描いたようなものではなかった。

しかし五六年という時点での実現の可能性の有無は別として、状況に対する詳細な批判的分析に基づく急進的民主化案と、再統一への段階的具体案の提示は、その先験性からいって今でも評価は高い。ハーリヒの評伝を書いたS・プロコップによる評言を引いておこう。

「ハーリヒのプログラムは、ＤＤＲの五〇年代における反スターリン主義的反対派を代表する者たちが提示した最も急進的な代替案であった。これはウルブリヒト指導部の失脚を意図したものであり、あらゆる考察はウルブリヒトのスターリン主義的政策の除去をめぐるものである。これはまたそれぞれ異った専門家（シュタインベルガー、シャフラ）と討論されることになっていたまずは草案であったにもかかわらず、戦略的才能と、資本主義への別の移行社会としての現存社会主義の歴史と現在の急進的批判を取り込んでいる。（略）ハーリヒの認識の深さは五六年という時間の地平で考えてみねばならぬが、この点でかれはウルブリヒトの反対派だったすべての人びとを凌いでいる。」[61]

（ハーリヒとヤンカとの間の対立は、ハーリヒがヤンカはウルブリヒトの手先だ、と言うほどの対立となり、[62]のちに互に裁判ざたにまで発展したが、両者が死亡した今、対立の原因と事実はどこにあるか、はまた別のテーマとなるのでここでは扱わないことにする。）

6、ミールケ

主人公コリンと対決しているシュタージの長ウラックは、現実ではエーリヒ・ミールケである。ミールケとヤンカの出会いは、まずスペイン内戦時代に遡る。三六年一一月、亡命先のチェコスロヴァキア青年同盟中央委員会から派遣されてヤンカは、パリ経由でペルピニヤンからスペインに入り、バルセロナ、バレンシア、アルバセテ（ここに国際旅団参謀本部があった）で二週間の軍事訓練を受けたあとで、テールマン大隊の補充兵としてムルシアの第一中隊へ配属される。到着後二日目に第一一旅団に呼び出され、おまえをスペインへ派遣したのは誰か、ここで何をするつもりか、などと尋問され、バレンシアへ送り返すと言われたのを拒否したヤンカが、一年後、バレンシアに国際旅団の「ＳＩＭ」すなわち軍事調査局（「疑わしき分子と戦うためのセクション」）の刑務所があり、スパイ、工作員、トロツキストなどの容疑者を収容する施設であるが、このバレンシアへヤンカを送り返そうとした男こそ、第一一旅団のＳＩＭのために働いていたエーリヒ・ミールケであることを知ったのである。[63] ミールケはモスクワでそうした仕事の訓練を受け、スペインへ派遣されてきていたのだ。（九二年にこれを読んだミールケは、息子に「その時期にその場所にいたことはない」[64]と伝えたそうだが、スペイン共産党中央委員会の外国人幹部会員で、当時ムルシアにいたグスタフ・ジンダによれば、ミールケは「数日間第一一旅団にいた」とのことである。[65] なおミールケは三六年一二月に第一四国際旅団の歩兵旅団の本部付少尉として任官している。）

ポソ・ルビオで将校になるための六週間の訓練を終え、大尉としてスペイン人民軍の第二七師団（カール・マルクス師団）に任官した時、よりにもよってミールケが小分隊の将校たちを第二七師団の将軍の所へ連れて行くことになった。ヤンカはミールケのことをこう描写している。「バレンシア、バルセロナ、タルディエンタを経由してアラゴン前線近くのアルバセテへの旅で、かれはわれわれの誰とも口をきかなかった。一人だけでクーペに乗

り、五人の仲間と私はとなりのクーペに割あてられた。バルセロナのホテル・コロンですごした夜もわれわれは〝旅のガイド〟に出会うことはなかった。」[66] それからヤンカは第一一三旅団の第四九一大隊の中隊をまかせられている。

その後ヤンカの記述にミールケが登場するのは、かつてのＫＰＤの国会議員で、ダッハオ強制収容所を脱走し、モスクワ経由でスイスに亡命し、最初のコムニストの指導者としてスペインに渡ったハンス・バイムラーとルイ・シュスターの死についての疑惑を、ゴメスことヴィルヘルム・ツァイサーの、八六年にヤンカの妻によってマドリッドで発見された第一一旅団の司令官クレーバー将軍（ラザール・シュテルン）宛の手紙を引用しつつ述べている所である。[67] その死の真相が解明されるのは、ソ連の秘密諜報機関ＮＫＷＤ（内部人民委員部）のアルヒーフの扉が開かれる時だろうとして、ゴメスとかれの部下だったミールケが、同じくスペインへ派遣されていたＮＫＷＤの将軍オルロフの指示に従って行動していたＮＫＷＤの派遣員だったと記している。（これも真実ではない、ＮＫＷＤの活動とは何の関係もない、とミールケは九二年にヤンカの回想録の文庫版の出版差し止めの裁判を起している。）[68]

さらに三八年にすでに内戦の敗色が濃かった頃、第一一旅団へやってきた、かつてのＫＰＤ国会議員でのちのコミンテルンの西欧でのスペイン連帯運動の代理人アルトゥーア・ベッカーの死についても、なぜかれがもはや何もなすことのできなかったスペインへ、完全に無意味に派遣されてきたのか疑問を呈し、バイムラーとベッカーの死には、アナーキストの有名な指導者ボナヴェントゥーラ・ドゥルッティが同じアナーキストの仲間たちによって粛清されたのと同じ背景があったのではないか、と推測している。[69] 従ってドイツ人に関するかぎり、ツァイサーとミールケがスペインで活動した間に演じた役割、すなわちかれらが（スペイン）共和国に、トロツキスト、転向者、

スパイ、スペインのマルクス主義統一労働者党員らに対する闘争で害を与えた、という問題が明らかにされる必要があるとも述べている。[70]

ヤンカがミールケに触れている個所はこの三個所だけであるが、かれら二人の出会いは最初から印象のいいものではなかったのである。片方が終始前線部隊の指揮官をつとめ、もう片方はＮＫＷＤの手先として、反スターリン主義者狩りを役目としていたのでは、そうなるのも当然であったろう。先に引用したラダッツは、ヤンカがＮＫＷＤらの活動についてほとんど触れていないと文句を言っているが、右に見たように、そんなことはない。確かに事実としての具体例を挙げてはいないが、それは恐らくヤンカが、ハマラ、グアダラハラ、ウェスカ、サラゴサ、テルエル、エブロなど主たる戦線で前線部隊（第一二三旅団の第二七師団の第四九一大隊、この大隊には、アナーキストの中隊もいた）司令官（少佐）として活動していたことを考えれば、ＮＫＷＤの活動をいちいち各地で調べて回る暇などなかったであろうからだ。政治将校ではなかったのである。

さてヤンカはドイツへ帰還後の四八年に、ハレのツァイサーと交代するようにと党から提案を受ける。シュタージの仕事である。ヤンカは出版の仕事をしたいとこれを断っている。ミールケからもすでに二度、二倍の給料、党のそれよりは三倍広い仕事部屋、公用車に馬もどうか、と提案されていたが拒否していたからである。そうした特権にあずかる気も、シュタージの仕事もする気はなかったのである。そしてＡ・アッカーマン（文化、芸術、文学、映画担当）の提案を受け、映画会社ＤＥＦＡの仕事を引き受ける。[71]

これもラダッツは、映画のことなど何も知らないのに、党の言いなりになった一例として非難しているが、ヤンカは何でも言いなりになったわけではない。すでに三〇年代にモスクワのレーニン学校への誘いをことわり、同

じく軍事アカデミーへの派遣も拒否しているし、スペインの内戦時代のヤンカの態度はしばしば党の決定に違反していたが、その態度がどうであれ、常に紀律にのっとったものだと心得ていたので、比較的早いうちに自分で自分の道は決定し始めていた、とヤンカは述べている。[72] つまり戦時中はコミンテルンの言うことをよく聞き、戦後はソ連の顧問たちの要求に無批判に従う出世主義者ではなかったのである。この点がミールケとヤンカとは体質的に違っているのだ。このあとミールケが出てくるのはヤンカが逮捕されて以降である。

ミールケの履歴といえば、〇五年に車大工の家庭に生れ、二一年共青同盟、二五年共産党入党、三一年八月九日ベルリンのビューロー広場近くで二名の高級警察官アンラオフとレンクが射殺され、これに関連してベルギー経由モスクワへ亡命。三四年に欠席裁判で死刑の判決、国際レーニン学校へ（三五年まで）、三六年から三九年までスペイン内戦の国際旅団に参加。三九年フランスの収容所へ一時入所、再びソ連へ。四五年ドイツ帰還後ベルリン・リヒテンベルク地区の警察責任者、四六年から四九年内務省中央管理局副長官、五〇年から五七年シュタージ担当書記、五七年から八五年までシュタージ大臣。五〇年から八九年まで中央委員、七一年から政治局員候補、七六年政治局員。五八年から八九年まで人民議会議員、八九年一二月ＳＥＤから除名、八九年未決拘留、九一年に三一年の警察官射殺に関与したとして告発され、九三年懲役六年の判決を受けている。[73]

こうしてみるとミールケは終始一貫して警察公安畑で仕事をしていたことがわかる。そのミールケとヤンカ、小説ではウラックとハヴェルカは同じ病院で、人生の最後に再び顔を会わせそうになるが、直接悦会う場面は結局はない。現実でもそうであったであろうように二人が交わることはない。そしてむしろ国家権力を象徴するウラックと対決するのは、ハヴェルカによって命を救われ、歴史の真実を書くことを委託されたコリン、スペイン内戦時の

みならず、ハヴェルカ＝ヤンカ事件を直接見聞して、ハヴェルカの意志を代弁し、擁護するべき義務を負っているコリンである。

まずミールケとコリンの出会いは次のように描写される。

世界は暴力によってのみ引っくり返すことができると確信しているヴィルヘルム・ウラックは、現代の暴力は人工的に結合した機構、情報、分析評価、指図、実行であるとし、その機構を支配している。突然めまいがし、目の前が真っ暗になり、大学病院で、数年早く来るのでしたね、と言われる。心臓、血管をはじめ、循環器系すべてが悪化していたのである。

コリンとウラックはお互の病状を、そして何をしようとしているのかを探り合う。コリンが回想録を書いていることを知ったウラックは、助けてやろう、材料はいくらでもある、お互の道はスペインでの日びから例の裁判に至るまでしばしば交じわっているではないか、と言う。これに対しコリンは、「同志ウラック、それは人びとがいつか、本当はどうだったのか、我われが今日あるようなのはなぜか知るためだ、という意味ですか？」「そうかも知れない。しかし君はそれはきっと書かないよ、同志コリン」「なぜ書かないと？」「臆病だからさ。」ウラックは知っていたのである。人間はごく短期間で肉体的に衰弱するのを、しかも触わりもしないのに、ただ少し心に圧力を加えただけで。[74]

最初からウラックとコリンは肉体的にも、心理的にも対決を迫られる。一方が権力側から見た真実を提起できる

のに対し、他方は権力側の恣意的な事実構成には、それを現実に体験した者のみが持つ真実の重みを対置できる立場にいながら、ほとんど主観的ディレンマに陥ってそれができない。そのウラックから見た事実は次のようなものである。

コリンの書いているのは一面的だ、コリンは何を知ったというのか、ある時はこの男、ある時はあの男を大きな歯車の中に陥れることになった原因と動機に関して誰が何を知ったというのか。意見の相違、しかも政治的種類の相違だと？ユリウス・ファーバーはいつもただ支配的意見を代表していたにすぎない。西側の亡命、それだけで不名誉ものだ。どれだけ多くの徳からはずれる機会が、どれだけ多くのコントロールされない接触、考え方があったことか。しかもかれ自身西側にいたのだ、メキシコ、アメリカに。

たとええコリンが記憶の中から吸い上げたことをすべて解読できるとして、それからどうなる？重荷となっていた圧力が緩和されれば、かれを駆り立てていた不安から解放されて、深く息つくことができるというのか？

問題は誰がまず致命的な梗塞を受けるかだった、ウラックかコリンか、もちろんコリンだ。

ウラックはコリンの病室に入ってきたクリスティーネとはち合わせする。かれはペーターとかの女の関係を語る。あなたの個人的なことに介入するつもりはないが、信じてほしい。この時代に、他人にとっても関心のない個人的なことは存在しない。この国の中を見回してごらんなさい、どう思いますか？われわれは人びとに長年たたき込んできたが、かれらは相変らず自分と世界の構造を持っていない、せいぜい物質的な利益を望んでいるだけだ。情けない状況だが、私が若かった時、若き革命家として夢見たものではない。今は年老いた革命家だが、われわれは期

間を余りに短かく設定しすぎたことを学ばなくてはならなかったのだ。[75]

ここではスターリン時代の粛清、秘密裁判の原因、動機、背景を知る者は自分たちだけであり、また自分たちのコントロールをはずれた行動、考え方を許すわけにはいかないとの革命時代からの抜き難い思考法が、結局は西側亡命者の弾圧へつながっている事を告白している。それに権力の執行にともなうさまざまな重圧のほかに、自分の身内である孫のペーターの造反、そしてペーターを育てた妻レースヒェンとの確執、こうした心理的負担は少しずつウラックの心身を蝕んでいく。

「あれはばかげた企てだったね。にもかかわらず不正は不正だ。黙っているわけにはいかない。」

「不正だと！このばあさんをよく見ろ。やつらがかの女にしたことこそ、不正というものだ！こういうことが二度と起きないためにわれわれはいるんだ、わかったか！」

「暴力は暴力、不正は不正、当時も今も、向こうでもこちらでえも。」

「おまえがやつにこういった考え方を教え込んだんだろう。弁証法とは何かを教えるかわりに。不正は即不正じゃない。すべては、誰が何のために事をするかにかかっているのだ。」「しかしおまえはそれを決してわかろうとしなかったし、おれを、おれの使命を、義務を嘲ったのだ。それに若いのがそばにいても、口を閉じようとさえしなかった・・・」

「たしかにわれわれは不正を犯したさ。またもっと多くの不正を犯さねばならぬだろう。革命はパーティ・ゲー

ムじゃない。しかし最後には、われわれが世界を変えたのだ、ということが明らかになるだろう。それがすべてのことの正当なる理由だ。」

「誰がそれをきめるんです？」ペーターが問う。「いくらでも多くあなたがたは不正を犯すことができる、しかし誰に対してですか？」

三人の議論はかみ合わない。

「私が留まったのは、あなたが多くの物を、この国にある最善の物を提供してくれたからです。権力を持つ者は、快適さをも持つのです。その妻も同じです。これは堕落です。私はそれより劣っているのです・・・」

「それにこの子もいましたしね、私は考えたんです、この子にはもっとましな生活をしてほしい、この時代のあなたや私のように成長してほしくないんです。」

「だからあいつは紙片を張ったというのか、六八年の進駐の際に、え？」[76]

ウラックの語る「これらの言葉にはスターリン主義のモラルが、もっと言えばアモラルが反映している。それは自ら任命した歴史を実現する助っ人として掛け替えのないものとみなし、ハイムの言葉を借りれば、〝階級の頭脳、盾、死刑執行人〟であろうとする人びとのものの考え方と言い表し方に対応しているのである。かつてＤＤＲの作家の小説の中で、どこにこんなことが書かれていただろうか？」（フリッケ）[77] ハイムのこの言葉はコリンとウラックの対話の中に出てくる。

コリンとウラックは再び対話を交わす。そのうちにウラックは、なぜおまえは死ぬことを拒否したのだ、我われがおまえに証明しただろう、おまえは必要ないということを。必要なのは我われだけだ。我われは代えがたいのだ。階級の脳、盾、死刑執行人だ。他のすべての連中は交換可能だ。自分らの役割を分けてもらってそれを演ずる。しかも規則によってだ。おまえだけがいっしょにやろうとしないで逆らった、同志ファーバー、と言い出す。コリンとファーバーを取り違えていたのだ。何たる光景か、同志ウラックが同志ファーバーに追い回されている。[78]

こうしたウラックの思考方法は、なんと傲慢不遜であろう。革命を実行するのはわれわれだけだ、あとの者はどうでもいい、これはまさにアモラルである。

西側逃亡を企てる世代と革命を指導した世代との間の断絶の問題に関しては、『コリン』以前の七七年にT・ブラッシュが『父親の前で息子は死ぬ』で鮮烈なデヴューをして世間に知られるようになった。父親ホルストはSED中央委員会委員、人民議会議員、諸国民友好連盟書記長だった。ミールケ自身、八九年一二月に逮捕され、精神的にも、神経的にもまいっている時に、一人息子のフランクは医者でありながら父親の手助けをしなかったという。親子の関係は当時きわめてむずかしい状態にあったようだ。[79]

断絶といえば、この小説では、ケレス＝ルカーチの思想が、いや名前すら若い世代に全然伝わっていない、ましてやハンガリー人民蜂起の実態が少しも知られていない、という設定で表現されている。

ケレスは自分自身必要とするものはわずかだったが、しかしバカげた事に対しては、それが権力の最高部で表明

されたとしても、容赦なかった。故郷での不愉快事（ケレス自身の命名）のあと破門に付されたこの異端者は、ブダペストでは十分の九は名誉回復され、晩年を自宅でのんびりと仕事するのを許されたというのに、この国ではその後も追放されたままだ。

クリスティーネはかれの名前すら知らない。わが国でも長いことマルクス主義美学の分野での古典と見なされていたというのに。そこでかの女に、最も重要な出来事を数え上げたあとで、簡単にこう述べて聞かせる。あらゆる出来事には、およそ個人の過ちや悪意ばかりがあるのではなく、もっとよく注意すればもしかすると避けることができるかもしれないが、プロレタリア革命に内在しているように思われるもっと多くの傾向や発展が存在する。そこでケレスの説明によりながら、彼女にこの不愉快事の経過の輪郭を与えてやる。これに対しクリスティーネは質問する。ポロックやケレスのような人々は何がきっかけとなって、このような国ぐにに住むことになったのか、つまりポロックは当時、目の当りにするであろうさまざまな関係に関する知識も全く無くはなかったにせよ、西側から移ってきたのであり、ケレスにいたっては、危うく殺されそうになったし、せいぜいのところ快適な運命も待ち受けていなかった国へ、逃亡後も再び帰っていったのはなぜか、と。ケレスはこう答えたという。いったい我われの国でなければ、どこでこんなにも多くの矛盾を観察し、新しいことを発見し、分析することができるか、それにまさに、他の大陸での経験もあり、権力構造への洞察力もある私のような男だからこそ、目びの出来事に対して必要な距離を置いて観察することができ、来るにちがいない変革に寄与することができるのだ、と。[80]

プロレタリア革命に内在しているかも知れない過ちや悪意といったものを明らかにするためには、現場にいて多

くを観察して分析し、しかも必要な距離を置くことができる立場が肝心だ、とケレスが言ったことになっているが、他の大陸での経験もあり、とあるから、これは明らかにハイム自身の立場を述べている。ハイムはこの立場をＤＤＲ崩壊まで保持しつづけ、西側に出ることはなかった。

しかしやはりクリスティーネのような若い世代がルカーチの名前も知らず、また自国の現代史に無知だというのは問題である。これは単に教育の問題にとどまらず、権力の恣意的行使の一典型であり、体制に都合の悪いことは国民に知らせたがらないのは、どの体制でも同じだ。しかし社会主義の場合これはスターリン主義の重要な要素のひとつで、知ろうとする者はひどい弾圧をくらうことは決まりとさえなっている。コリンの病因を探ろうとして、かれやハヴェルから知らなくてもいいことまで知ろうとしたクリスティーネは、上司ゲリンガーによって左遷されてしまう。[81]

この点はハーリヒの前記構想でも、党は大衆に国際政治やＤＤＲ内の生活のあらゆる要件に、完全にありのままの真実を言わねばならないとし、気に入らない事実を揉み消したり、取りつくろったり、対立を公衆から秘密にしたり、以前に犯された誤りを否定したり、無害にしたり、〝よくない雰囲気〟をデマゴーグ的に〝ポピュラー〟な措置によって、ないしは空疎な約束によって〝落ちつかせ〟てはならない（Ⅰ部Ⅱ章２ｃ）[82]と明確に批判していた。

そして孫のペーターが西側へ逃亡したことを聞いたウラックにコリンはこう問いかける。「私はあんたにこう自問してほしい――これまでの全部は何のためだったのか、ファーバーの件、また多くの他の人びととの件に苦労したのは何のためだったのか、もし息子たちがわれわれに背を向けるならば、と。答えを聞きたいものだ。それを私の本に取り上げよう、ここで今夜語られたすべてのことといっしょにね。」[83]こう問われて自分の執務室に戻ったウラッ

クはこう叫ぶ。

自分の執務室へ戻ったかれは、ユリウス・ファーバーに関する全資料を持ってこさせる。「われわれは非常に多くの誤りを犯した、諸君！」「何らかの連中を間違って逮捕し、告発し、判決を下したことは間違いではなかった。プロレタリアートの独裁のためになされたことが、何で間違いでありうるのか？間違いなのはむしろ永遠の後退であり、インテリども、教会、青年の消費欲、西側に永遠に譲歩することだ。そんなふうにわれわれ自身が反対派を飼育し、あらゆる街角、すみずみで隠れた不満を感じている。しかしわれわれは何をしているのか。断固たる手段に訴え、うちかかるかわりに、反抗的な国民にいいようにあしらわれている」

多くの同志はこれを一種の政治的遺書と見なした。最後に、われわれはなお革命を犠牲にしている！と叫び、これからは日和見主義はおしまいだ。ファーバーに対する訴訟手続きを再び開始する、と指令し、同時にハヴェルカや愚かにも無罪放免したすべての連中に対する、ならびにまだ処置されなかった作家コリンのような連中に対する新たな訴訟手続きが開始されるべきである、と要求した。というのも「まだ頭の中に温められている裏切りは一番危険だ」

そしてウラックはどなり始める。陰謀だ！そいつは役所の中まで達している。国家と党の幹部を混乱させ、麻痺させる目的を持った陰謀だ。このウラックを病因のベッドに鎖でしばりつけておけ、陰謀家どもがますます邪魔されずに蠢くことができるようにな。だが俺は陰謀を見通しているし、俺の心臓は鋼鉄でできている、俺はやつら全員より生き延びてやるぞ」そう言うとかれは倒れたのだ。

これらの事の詳細は、次のような問題を投げかけているだろう。すなわち、定言的命令（革命にとっていいものは、いい）のプロレタリア革命の新たな倫理による相対化は、たしかに幻想でないかどうか、そして実際は古い道徳法が今後も有効でありつづけ、その結果、革命の名によって古い道徳法に違反することができると信じている連中は、かれらの誤りで破滅していくかどうか、という問題である。[84]

七九年の時点でハイムが投げかけた問題は、八九年一一月のベルリンの壁崩壊によって解答は出た。ウラックが倒れるという状況設定は決してありえないことではなかったのである。革命の法を体現する検事総長メルスハイマー、革命の定言的命令によって友を見捨てた桂冠詩人ベッヒャー、最後は国家元首をつとめたホーネッカーが、みな癌で苦しんで死亡したことを思い起こすと、革命という名の神もなかなか味な裁定を下したものだという気がしないでもない。

7、コリン

最後に再びコリンに戻ろう。コリンとウラックは再び対話を交わすうちに、ウラックはなぜおまえは死なないのか、と言い出す。必要なのはわれわれだけで他の連中はみな交換可能なのに、おまえだけがいっしょにやろうとしないで逆ったではないか、と言った。ウラックはコリンとファーバーを取り違えたのだ。この光景を見てコリンは、誰でも自分を追求する自分の影、ウラックはファーバーを、コリンはハヴェルカを持っていることを悟る。

そしてこう悟った時にコリンは、問題がどこにあったのかがはっきりとわかった。要するに自分は沈黙したのだ、と。[85]

自分は、少なくとも自分自身との対決に勇気が必要な職業には向いていない。ところがスペインで、私に生を贈ってくれた人間がいて、その男は、死ぬよりももっと重要な任務を果せ、と言ったが、その任務は勇気を必要とした。私は窮地に陥った。その任務を怠ることでその窮地から逃れたのだ、と。

しかしそれからあの日が、私が発言せねばならなかった日が、法廷での一日がやってきたのだ。告訴されたのは私に生を与えてくれたあの男、ゲオルク・ハヴェルカなのだ。私は検事総長の挙げる間接事実を聞き、それをどう構築したかがわかった。そして私は実際はどうであったか、を知っていたのだ。私はハヴェルカが私を見ているのがわかった。そして私はだまったままだった。私には任務が、より高い任務があった。私は書かねばならない、すべてを記録せねばならない、そして書くことのできるためには、生きなくてはならない。もし私が立ち上り、抗議し、もしくは大声で笑ったりすれば、その時私は片づけられ、もはや二度と書くことはできないであろう。それから忘れたのだ、ただ私が沈黙していた数分間を。

そして今日この数分間を思い出したのだ。それからはっきりとわかった、夜中に心臓を締めつける圧力がどこからくるのかを。この沈黙にかわるだけの仕事をしたのか、どれだけ重要な真実をおまえは発表したことがあるのかと自問したのだ。[86]

コリンは死から救ってくれた大恩人の決定的瞬間に沈黙した。それも自分にはより高い任務、すべてを書くためには生きなければならない、を口実にして沈黙した。ではいつその任務を果たしてくれるのか、という不断の無言の要求は確かにストレスになりうる。コリンが病院に逃げ込まざるをえないのも無理はないのである。

とすると、このコリンにはヤンカ事件に関して、共犯とされてもおかしくはないのに沈黙を決め込んだ文化大臣ベッヒャーや作家ゼーガースの負のイメージがダブらせてあるのは疑いなかろう。ゼーガースもヤンカ裁判の傍聴席にいたのである。しかもヤンカが釈放されてのち、知人宅のパーティで偶然出会ったゼーガースは、ヤンカに怠惰の罪について詫びるどころか、事件については全然触れず、党大学の過程を修了するべきだ、と語ったとのことである。[87]党の言うことは常に正しいと考えていたのか、単に保身のためだったのだろうか。いずれにせよコリンよりはよほど強靭な神経をしていたのであろう。

ゼーガースに比べれば、ベッヒャーの態度などかわいいものだ。誰も助けてくれる人がいなかったので、いつものようにシャールミュッツェルゼーの病院へ逃げ込んだ、[88]とのことだ。

そしてウラックともあろう者が、過去の影に怯えて錯乱し卒倒する、という設定は、ミールケが権力を奪われ逮捕されたのち、一時的に錯乱して、心身ともに衰弱し、自分の誕生日がわからず、眼鏡をかけていたか、自分がミールケであるかどうかもわからないほどだった、[89]ということであるから、あながち非現実的な話でもなくなる。体制を裏から支えてきたミールケにしてみれば、その体制が崩壊するなどという事は信じられなかったに違いない。錯乱するのも無理はない。ハイムの感覚は七九年の時点でそれを先取りしたのだ。

現存したＤＤＲ社会主義体制も結局のところ、この小説に描かれたようなスターリン主義的体制を清算できな

かったことが、体制崩壊の原因だったことは争えまい。

最後にコリンは、自分の命が惜しくて書けず、書けないことが負担となって病気になる、というこの堂堂巡りから脱出するためにすべてを捨て去ることを決心する。そして一種のオイフォリー、精神の高揚状態の中で、自らの遺書ともいえる回想録を書きつづけるうちに死が静かにやってえくる。コリンの死後、友人のポロックがその恐らく未完の遺稿を他人の手にわたる前に持ち去る。こうしてハイムの他の多くの小説と同じく、将来へのいささかの希望を残してこの小説は終わる。

注

① Walter Janka: Spuren eines Lebens. Rowohlt.1991.

② Walter Janka: Scchwierigkeiten mit der Wahrheit. Rowohlt, 1989.

③『沈黙は嘘』暴露された東独スターリン主義、林功三訳（②の訳書である）、平凡社一九九〇年、一八七頁以下。

④ Die zeit, Nr.17. 19. April 1991, S.45 ff.

⑤ A. Herbst/W. Ranke/J.Winkler: So funktionierte die DDR, Band 3, Lexikon der Funktionäre. rororo HANDBUCH 6350, 1994, S.157f. und G. Baumgrtner/D. Herbig (Hrsg.): Biographisches Handbuch der SBZ/DDR 1945-1990. Band 1, K. G. Saur, 1996, S.356.

⑥ Collin, S39.

⑦ Ebenda, S.40f.

⑧ Wege, S.377.

⑨ Collin, S.41f.

⑩ Ebenda, S.78.

⑪ Ebenda, S180f.

⑫ Ebenda, S.183.

⑬ Ebenda, S.192-198.

⑭ Janka: Spuren..., S.314. Schwierigkeiten, S.67.『沈黙』一一一頁以下。ただし人称表現が、私はヤンカ、ミールケは昔の知人となっている。

⑮ Spuren ....., S.321f. Schwierigkeiten, S.75.『沈黙』一一三頁以下。

⑯ Spuren, S.402.

⑰ Ebenda, S.404f.

⑱ Ebenda, S.405.

⑲ Ebenda, S.406.

⑳ 拙稿「S・ハイム対第十二回中央委員会総会」神奈川大学『人文研究』第一四三集、二〇〇一年、七六頁以下。

㉑ Collin, S.384.

㉒ Wege, S.375.

㉓ Wolf: Kindheitsmuster, Brasch: Vor den Vätern sterben die Söhne, Heiduczek: Tod am Meer, Fucks: Gedächtnisprotokolle, Becker: Schlaflose Tage, Poche: Atemnot, Schneider: November, Hermlin: Abendlicht, Strittmatter: Der Wundertäter, Bd.3, Loest: Durch die Erde ein Riss. Ein Lebenslauf, Hein: Der Fremde Freund, Horns Ende.

㉔ J.-R. Groth/K.Groth: Materialien zu Literatur im Wiederspruch. Wissenschaft und Politik, 1993, S.34ff.

㉕ Wege, S.375.

㉖ Ebenda, S.376.

㉗ Collin, S.236-253.

㉘ Spuren, S.264-269. Schwierigkeiten, S.28-35. 『沈默』四四～五八頁。

㉙ Spuren, S.270. Schwierigkeiten, S.36f. 『沈默』六一頁。

㉚ Ebenda, S.271. Ebenda, S.40. 同書六六頁

㉛ Die Zeit, Nr.17, S.46.

㉜ Spuren, S.385f. Schwierigkeiten, S.91. 『沈默』、四五頁。

㉝ Schwierigkeiten, S.37. 同書六、頁。

㉞ Spuren, S.395. Ebenda, S.104. 同書、六四頁。

㉟ Collin, S.320.

㊱ Ebenda, S.303-316.

㊲ So funktionierte die DDR, S.226. Biographisches Handbuch, Bd.2, S.536f.

㊳ Spuren, S.343.

㊴ Ebenda, S.346-348.

㊵ Ebenda, S.348.

㊶ Ebenda, S.351f.

㊷ Ebenda, S.355.

㊸ Collin, S.273-276.

㊹ Collin, S.154-162.

㊺ Spuren, S.355.

㊻『人文研究』第一四三集、七三頁以下。
㊼ Biographisches Handbuch, S.279f.
㊽ Spuren, S.359.
㊾ Ebenda.
㊿ Ebenda, S.361ff.
(51) Schwierigkeiten, S.89.『沈黙』一四一頁。この部分（八六頁下六行目～八九頁下八行目）が、Spuren では削除されている。
(52) Collin, S.306.
(53) Wolfgang Harich: Ahnenpaß, Versuche einer Autobiographie. Hrsg. von Thomas Grimm, Schwarzkopf & Schwarzkopf, 1999.
(54) Ebenda, S.225ff.
(55) Ebenda, S.229.
(56) Ebenda, S.287f.
(57) Ebenda, S.290.
(58) Ebenda, S.294.
(59) Ebenda, S.347.
(60) Wolfgang Harich: Keine Schwierigkeiten mit der Wahrheit. dietz berlin, 1993. S.112-160.
(61) Siegfried Prokop: Ich bin zu früh geboren, Auf den Spuren Wolfgang Harichs. dietz berlin, 1997, S.109f.
(62) Ebenda, S.287.
(63) Spuren, S.91ff.
(64) Wilfriede Otto: Erich Mielke-Biographie. dietz berlin, 2000, S.66.
(65) Ebenda, S.523.

(66) Spuren, S.100.

(67) Ebenda, S.170ff.

(68) Stern, Nr.50. 1992, S.302f.

(69) Spuren, S.173.

(70) Ebenda.

(71) Ebenda, S.214f.

(72) Ebenda.

(73) So funktionierte die DDR. S.229. Biographisches Handbuch, Bd.9. S.545.

(74) Collin, S.44-55.

(75) Ebenda, S.213-224.

(76) Ebenda, S.122-125.

(77) Fricke, S.485.

(78) Collin, S.329f.

(79) Heribert Schwan: Erich Mielke, Der Mann, der die Stasi war. Droemer Knaur, 1997, S.14.

(80) Collin, S.104-108.

(81) Ebenda, S.348.

(82) Keine Schwierigkeiten, S.118.

(83) Collin, S.278.

(84) Ebenda, S.295ff.

(85) Ebenda, S.341f.

86 Ebenda, S.344-354.
87 Spuren, S.446.
88 Spuren, S.271. Schwierigkeiten, S.39.『沈黙』六四頁以下。
89 Otto, S.488f.

四、

ウラックによってコリンに与えられた使命の意を体して書かれたのがこの小説であり、またポロックの持って出たコリンの未完の回想録を、ハイムは自分の自伝『追悼の辞』（八九年）として完成させた。さらにヤンカは自らその使命を果して『真実に係る困難』と回想録『ある人生の軌跡』を遺した。

この自伝の一章（三七）をハイムはこの『コリン』のために割いているが、この仕事がいかにつらい作業であったかを回想している。そしてコリンやウラックが心身に異状をきたすという設定が、単にハイムの想像上の出来事ではなく、しっかりとしたリサーチに基づいていることが語られている。すなわち、ハイムの置かれている状況や、感じやすいインテリたちの心身に対するそのような状況をよく知っている精神医学者や神経科医に、精神身体医学についての講義を受け、実地に入院し、診察、治療を受け、話し合いをした体験が基礎になっている。さらにコリンにはハイムの隣人で友人のヤン・ペーターゼンの特徴が、ウラックにはディミトロフと非合法活動をし、スペインの橋の下でヘミングウェイと共に寝たこともあるリヒャルト・シュタールマンの性格が与えられているという。①

こうしてみると、この小説は、確かなリアリズムに裏打ちされた大政治社会小説であり、これまでお座成りにされていたＤＤＲのスターリン主義ときちんと対決し、清算すべきことを文学においてのみならず、政治、社会の分野においても呼びかけ、またしても体制の逆鱗に触れた書だということができよう。

ウルブリヒトにせよ、その後を襲ったホーネッカーにせよ、ハーリヒらの提言を少しでも取り入れて民主化を実行に移していたならば、その場合もちろんウルブリヒトはその地位に留まる事はできなかったであろうが、少なくとも跡を継いだその時点でホーネッカーが大胆な民主化に踏み切っていたならば、あるいは遅くもゴルバチョフの登場に合わせてコース変更をしていたならば、少なくとも壁の崩壊、国家消滅などという無様な結末にはつながらなかったであろう。ホーネッカーもまた一時的な雪どけの季節を持ったとはいえ、結局スターリン主義的な頑迷固陋な思考方法から抜け出ることができなかった。

要するにアプリオリに社会主義というものがあるわけではないから、批判的、建設的な提言も含めて社会主義を豊かにすることによって人民の文化的、社会的、政治的レヴェルの向上に努めるのではなく、ただ自らの体制、自らの政権の維持のみが目的となってしまい、先に触れたように、若い世代にルカーチやＥ・ブロッホらの批判的マルクス主義思想を伝えることがないように、同じ社会主義の立場に立っていても、異見を持つならば党幹部であれ、インテリであれ、芸術家であれ、次つぎと排除することによってマルクス主義、社会主義の思想をやせ細ったものにしてしまった。

そしてそのおのれの権力体制維持の根底にあるのは、ハイムが何度も強調しているように、それが人民によって付託されたものではなく、モスクワによって与えられたものだという政権の正統性をどうしても疑問視せざるをえ

ない内心の自信の無さである。それが事あるごとに逆に、端から見ると滑稽なほど夜郎自大な態度となって現われる。まさにこれこそが「ＤＤＲという特殊な次元における社会主義のスターリン主義的奇形」[2]なのである。

六五年の第一一回中央委員会総会以来、ＤＤＲのこうした社会主義体制にはっきりと批判的立場を打ち出してきたハイムとしては、『怪文書』を書き、『ダヴィデ王レポート』を書き、『六月の五日間』を書いてその都度出版拒否され、西側での出版を余儀なくされてきた。そしてまたビーアマン追放事件が起きた。

こうした文化官僚どもの尊大、無知蒙昧な態度にいよいよ痺れを切らし、この体制の本質的部分が何であるのかを仮借なく描き出して、この問題をどうするつもりなのか、と当局に突きつけたのがこの小説である。当局の反応は冒頭に見たとおりである。スターリン主義の清算にも民主化にも何も動かなかった。

動いたのは人民の側であった。堪忍袋の緒が切れたのである。ハイムやクリスタ・ヴォルフらが民主主義的社会主義のために立ち上ろう、と呼びかけた時にはすでに遅すぎて、政権は見捨てられた。そして壁の崩壊がやって来た。『コリン』が新しい「ノイエス・ドイッチュラント」紙に連載になったのは、九〇年二月のことである。

最後に、ヤンカと同じくバオツェン刑務所に収容されたこともあり、西へ出てから一貫してシュタージ問題を追及してきたカール・ヴィルヘルム・フリッケの評言を紹介してこの論を終りとしよう。

「文学的意義を別にすれば、ハイムの小説は一級の政治的事件である。この小説で初めてＤＤＲの一人の作家が、スターリン主義との文学的清算を試みた。しかもほのめかしやあてこすりで満足せず、あからさまに、何も言いつくろうことなく、といってまた誇張することなく、暗号化せず、歴史的には真実である。ハイムの叙事的な批判は幅広い。その批判は、そのために党の理性たる党員がある国家の刑務所へ行くことになった〝日常の不正〟に向け

られている。その国家のためにかれらは生涯をかけて闘ってきたというのに。

これと同時に、〝現実に存在する社会主義〟体制が問題となり、その体制は言われるように、恣意と法のグロテスクなアマルガムとして現われ、個人と社会の間の疎外を克服することからはるかに隔ってしまっている。ハイムは党に対する盲目的な信仰の呪縛を解き、政治的不道徳としてのその目的思考を暴露している。党のこの独善的倫理は見かけ上全能のシュタージ長官の孫によって笑いものにされる。〝暴力は暴力、不正は不正、当時も今も、向うでもこちらでも！〟と。

ＤＤＲの正統と認められたい欲求は、ＤＤＲの他の作家によっては、この小説ほど鋭く批判されたことはいまだない。」[③]

注

① Nachruf, S.813ff.

② Fricke, S.483.

③ Ebenda.

追記

二〇〇一年一二月一六日、ハイムは心不全のために、イェルサレムで客死した。享年八八歳である。

すでに八八年に自分で自分の『追悼の辞』を書いてしまったハイムに対し、人は何を書き加えたらいいのか。もちろん、ハイムが『追悼の辞』を二年遅れて、すなわち東欧の社会主義圏が崩壊し、ＤＤＲが消滅した後に発表していたら、もっと広い視点を獲得していたであろうし、もっと明確な立場を表明することもできたであろう。死の直前に至るまで、インタヴューに応じ、政治的トークショウで声をあげ、シュレーダー首相の招きでテロとの戦いにドイツが参加することに関するインテリたちとの闘論に応じるなど、その活動ぶりからいって、ハイムは最後の最後まで情熱的なホモ・ポリティクスであり続けた（Ｍ・イェーガー）[1]のは疑いなかろう。

これに対し、ハイムは文学美学上からいえば前世紀の人間であり、モダニズムにはほとんど関心がなかったのだろう、とＧ・クーナートは追悼の辞で言っている。「ハイムの野心は、社会で活動したい、という所にあり、ユダヤ人としては当然ながら、熱烈に言葉と、その疑いようのない意義を信じていた、という点でかれは愛すべき旧い人間であり、言葉を仕事の端女と考える遅れてきた啓蒙運動家であった」[2]というクーナートの評価も、同じ作家という立場から見れば、妥当な所であろう。

しかしクーナートも高く評価していることだが、ハイムには、自分たちの沈黙の声を代弁してくれていると考える多くの人びととの秘かな連帯感があったし、かれの存在が他の人びとに勇気を与えていたことも忘れられてはならない。

ハイムの作家としての、ジャーナリストとしての活動を振返ってみれば、よりよき社会のありうべき社会の実現を求めて、実際はそれが時代の幻影、ファータ・モルガーナであろうとも、戦い続けた一生であったということが

できるし、そういう意味でもハイムは戦闘的ウトピストの一人だった。筆者はこのユートピアンに一度しか会う事ができなかったが、その作品の内に秘められた戦闘的激しさとは違って、小柄で人なつこい、大変に親切な人物であった。冥福を祈りたい。

注

① Deutsland Archiv. Nr.1, 2002, S.4ff

② Der Spiegel. Nr.52, 2001, S.194